

高野聖

泉鏡花

文庫
青空

「参謀本部編纂の地図をまた繰開いて見るでもなかろう、と思つたけれども、余りの道じやから、手を触るさえ暑くるしい、旅の法衣の袖をかかげて、表紙を附けた折本になつてゐるのを引張り出した。

飛驒から信州へ越える深山の間道で、ちょうど立休らおうと
いう一本の樹立も無い、右も左も山ばかりじや、手を伸ばすと
達きそうな峰があると、その峰へ峰が乗り、巔が被さつて、飛
ぶ鳥も見えず、雲の形も見えぬ。

道と空との間にただ一人我ばかり、およそ正午と覺しい極熱の太陽の色も白いほどに冴え返つた光線を、深々と戴いた一重の檜笠に凌いで、こう図面を見た。」

旅僧はそういつて、握拳を両方枕に乗せ、それで額を支えながら俯向いた。

道連になつた上人は、名古屋からこの越前敦賀の旅籠屋に来て、今しがた枕に就いた時まで、私が知つてゐる限り余り仰向けになつたことのない、つまり傲然として物を見ない質の人物である。

一体東海道掛川の宿から同じ汽車に乗り組んだと覚えてゐる、腰掛けの隅に頭を垂れて、死灰のごとく控えたから別段目にも留まらなかつた。

尾張の停車場で他の乗組員は言合せたように、残らず下りたので、函の中にはただ上人と私と二人になつた。

この汽車は新橋を昨夜九時半に発つて、今夕敦賀に入ろうといふ、名古屋では正午だつたから、飯に一折の鮓を買つた。旅

僧も私と同じくその鮓を求めたのであるが、蓋を開けると、ばらばらと海苔^{のり}が懸つた、五目飯^{ちらし}の下等なので。（やあ、人参^{にんじん}と干瓢^{かんぴょう}ばかりだ。）と粗忽^{そそ}ツかしく絶叫^{ぜつきょう}した。私の顔を見て旅僧は耐え兼ねたものと見える、くつくつと笑い出した、もとより二人ばかりなり、知己^{ちかづき}にはそれからなつたのだが、聞けばこれから越前へ行つて、派は違^{ちが}うが永平寺^{えいへいじ}に訪ねるものがある、但し敦賀^{たなべ}に一泊^{ぱく}とのこと。

若狭^{わかさ}へ帰省する私もおなじ処で泊らねばならないのであるから、そこで同行の約束^{やくそく}が出来た。

かれは高野山^{こうやさん}に籍^{せき}を置くものだといつた、年配四十五六、柔和^{にゅうわ}なんらの奇^きも見えぬ、懷^{なつか}しい、おとなしやかな風采^{とりなり}で、羅紗^{らしゃ}の角袖^{かくそで}の外套^{がいとう}を着て、白のふらんねるの襟巻^{えりまき}をしめ、土耳其古形^{トルコがた}の帽^{ぼう}を冠^{かぶ}り、毛糸^{てぶくろ}の手袋^はを嵌め、白足袋^{しろたび}に日和下駄^{ひよりげた}で、一見、僧侶^{そうりよ}

よりは世の中の宗匠そうしょうといふものに、それよりもむしろ俗か。

(お泊りはどちらじやな)といつて聞かれたから、私は一人旅の旅宿のつまらなさを、しみじみ歎息たんそくした、第一盆ほんを持つて女中が坐睡いねむりをする、番頭ばんとうが空世辞そらせじをいう、廊下ろうかを歩行くとじろじろ目をつける、何より最も耐え難いのは晩飯の支度しだくが済むと、たちまち灯あかりを行燈あんどうに換えて、薄暗うすぐらい処でお休みなさいと命令されるが、私は夜が更ふけるまで寐ねることが出来ないから、その間の心持といつたらぬい、殊にこの頃ごろは夜は長し、東京を出る時から一晩の泊とまりが気になつてならないくらい、差支えがなくば御僧おんそうとご一所いっしょに。

快く領うなずいて、北陸地方あんぎやを行脚の節はいつでも杖つえを休める香取屋かとりやというのがある、旧もとは一軒けんの旅店りょてんであつたが、一人女の評判ひとりむすめなのがなくなつてからは看板はずを外した、けれども昔むかしから懇意こينいな者

は断らず泊めて、老人夫婦が内端うちわに世話をしてくれる、宜しく
ばそれへ、その代かわりといいかけて、折を下に置いて、

(ご馳走ちそうは人參と干瓢ばかりじや。)

とからからと笑つた、慎み深うつしそうな打見うちみよりは氣の軽い。

二

岐阜ぎふではまだ蒼空あおぞらが見えたけれども、後は名にし負う北国空きたくわく、
米原まいばら、長浜ながはまは薄曇うすぐもり、幽かすかに日が射さして、寒きが身に染みると思つ
たが、柳ヶ瀬やなせでは雨、汽車の窓が暗くなるに従うて、白いもの
がちらちら交つて來た。

(雪ですよ。)

(さようじやな。)といつたばかりで別に気に留めず、仰あおいで空

を見ようともしない、この時に限らず、賤ヶ岳が、といつて、古戦場を指した時も、琵琶湖の風景を語った時も、旅僧はただ頷いたばかりである。

敦賀で悚毛おぞけの立つほど煩わしいのは宿引わざらの悪弊やどひきで、その日も期したるごとく、汽車おりを下ると停車場ステーションの出口から町端まちはなへかけて招きの提灯ちょうちん、印傘しるしがさの堤つつみを築き、潜抜ける隙すきもあらなく旅人くぐりぬを取囲んで、手てに喧かまびすしく己おのが家号やごうを呼立てる、中にも烈しいのは、素早く手荷物ひつたくを引手繰ひきゆきつて、へい難有ありがとう様さまで、を喰くらわす、頭痛持かげりまわは血けが上るほど耐え切れないのが、例の下はげを向いて悠々ゆうゆうと小取廻とりまわしに通抜けとおりぬる旅僧は、誰たれも袖ひを曳ひかなかつたから、幸いその後に跟ついて町へ入つて、ほつという息を吐いた。雪は小止よいなく、今は雨も交らず乾いた軽いのがさらさらと面おもてを打ち、宵よながら門かどを鎖とぎした敦賀の通とおりはひつそりして一条二条

縦横に、辻の角は広々と、白く積つた中を、道の程八町ばかりで、とある軒下に迺り着いたのが名指の香取屋。
 床にも座敷にも飾りといつては無いが、柱立の見事な、畳の堅い、炉の大きいなる、自在鍵の鯉は鱗が黄金造であるかと思わるる艶を持った、素ばらしい竈を二ツ並べて一斗飯は焚けそうな目覚しい釜の懸つた古家で。

亭主は法然天窓、木綿の筒袖の中へ両手の先を竦まして、火鉢の前でも手を出さぬ、ぬうとした親仁、女房の方は愛嬌のある、ちよつと世辞のいい婆さん、件の人参と干瓢の話を旅僧が打出すと、にこにこ笑いながら、縮緬雜魚と、鰈の干物と、とろろ昆布の味噌汁とで膳を出した、物の言振取成なんど、いかにも、上人とは別懇の間と見えて、連れの私の居心のいいといつたらない。

やがて二階に寝床を拵えてくれた、天井は低いが、梁は丸太で二抱もあるう、屋の棟から斜に渡つて座敷の果の廂の処では天窓に支えそうになつてゐる、巖乗な屋造、これなら裏の山から雪崩が來てもびくともせぬ。

特に炬燵が出来ていたから私はそのまま嬉しく入つた。寝床はもう一組おなじ炬燵に敷いてあつたが、旅僧はこれには来らず、横に枕を並べて、火の氣のない臥床に寝た。

寝る時、上人は帯を解かぬ、もちろん衣服も脱がぬ、着たまま円くなつて俯向形に腰からすつぱりと入つて、肩に夜具の袖を掛けると手を突いて畏つた、その様子は我々と反対で、顔に枕をするのである。

ほどなく寂然として寐に就きそだから、汽車の中でもぐれいつたのはここのこと、私は夜が更けるまで寐ることが出

来ない、あわれと思つてもうしばらくつきあつて、そして諸国を行脚なすつた内のおもしろい談^{はなし}をといつて打解^{うちと}けて幼らしくねだつた。

すると上人は頷いて、私は中年から仰向けに枕に就かぬのが癖^{わし}で、寝るにもこのままではあるけれども目はまだなかなか冴えている、急に寐就^かれないのはお前様とおんなじであろう。出家のいうことでも、教^{おしえ}だの、戒^{いましめ}だの、説法とばかりは限らぬ、若いの、聞かつしやい、と言つて語り出した。後で聞くと宗門名誉^{しゆうもんめいよ}の説教師で、六明寺^{りくみんじ}の宗朝^{しゅううちょう}といふ大和尚^{だいおじよう}であつたそな。

三

「今にもう一人ここへ来て寝るそじやが、お前様と同國^{じや}

の、若狭の者で塗物の旅商人。いやこの男なぞは若いが感心に
実体な好い男。

私が今話の序開をしたその飛驒の山越をやつた時の、麓の茶
屋で一緒になつた富山の売薬という奴あ、けたいの悪い、ねじ
ねじした厭な壯俊で。

まずこれから峠に掛ろうという日の、朝早く、もつとも先の
泊はものの三時ぐらいには發つて來たので、涼しい内に六里ば
かり、その茶屋までのしたのじやが朝晴でじりじり暑いわ。

慾張抜いて大急ぎで歩いたから咽が渴いてしようがあるまい、
早速茶を飲もうと思うたが、まだ湯が沸いておらぬという。

どうしてその時分じやからというて、めつたに人通のない山
道、朝顔の咲いてる内に煙が立つ道理もなし。
床几の前には冷たそうな小流があつたから手桶の水を汲もう

としてちょいと気がついた。

それというのが、時節柄暑さのため、恐しい悪い病が流行つて、先に通つた辻などという村は、から一面に石灰だらけじやあるまいか。

(もし、姉さん。^{ねえ})といつて茶店の女に、
(この水はこりや井戸^{いど}のでござりますか。)と、きまりも悪し、
もじもじ聞くとの。

(いんね、川のでございます。)という、はて面妖^{めんよう}なと思つた。
(山したの方には大分流行病^{はやりやまい}がございますが、この水は何から、
辻の方から流れて來るのではありますか。)

(そうでねえ。)と女は何氣なく答えた、まず嬉^{うれ}しがやと思うと、
お聞きなさいよ。

ここに居て、さつきから休んでござつたのが、右の売薬じや。

このまた万金丹の下廻したまわりと来た日には、ご存じの通り、千筋の单衣ひとえに小倉の帶こくら、当節は時計を挟んでいます、脚絆きやはん、股引ももひき、これはもちろん、草鞋わらじがけ、千草木綿の風呂敷包ふろしきづつみの角ばつたのを首に結えて、桐油合羽とうゆがっぽを小さく置ちんでこいつを真田紐さなだひもで右の包につけるか、小弁慶の木綿の蝙蝠傘こうもりがさを一本、おきまりだね。ちょいと見ると、いやどれもこれも克明こくめいで分別のありそな顔ほほをして。

これが泊とまりに着くと、大形の浴衣ゆかたに変つて、帯広解おびひろげで焼酎しょうちゅうをちびりちびり遣りながら、旅籠屋はたごやの女のふとつた膝ひざへ脛すねを上げようという輩やからじや。

(これや、法界坊。)

なんて、天窓あたまから嘗めなていら。

(異なことをいうようだが何かね、世の中の女が出来ねえと相場がきまつて、すつぺら坊主になつてやつぱり生命いのちは欲しいの

かね、不思議じやあねえか、争われねえもんだ、姉さん見ねえ、あれでまだ未練のある内がいいじやあねえか」といつて顔を見合せて二人でからからと笑つた。

年紀は若し、お前様まえざん、私は真赤まっかになつた、手に汲んだ川の水を飲みかねて猶予ためらつているとね。

ポンと煙管きせるを抜いて、

(何、遠慮えんりよをしねえで浴びるほどやんなせえ、生命いのちが危くなりや、薬を遣らあ、そのため私わしがついてるんだぜ、なあ姉さん。おい、それだつても無錢ただじやあいけねえよ、憚りながら神方万金丹、一貼じょう三百だ、欲しくば買いな、まだ坊主に報捨ほうしゃをするような罪は造らねえ、それともどうだお前いうことを肯くか。)と
いつて茶店の女の背中を叩たたいた。

私はそうそうに遁出した。

いや、膝だの、女の背中だのといつて、いけ年を仕つた和尚が業体で恐入るが、話が、話じやからそこはよろしく。」

四

「私も腹立紛れじや、無暗と急いで、それからどんどん山の裾を田圃道へかかる。

半町ばかり行くと、路がこう急に高くなつて、上りが一力処、横からよく見えた、弓形であるで土で勅使橋ちょくしげしがかかつてゐる。上を見ながら、これへ足を踏懸けた時、以前の薬売くすりうりがすたすたやつて来て追着おいつけいたが。

別に言葉も交さず、またものをいつたからといって、返事をする気はこつちにもない。どこまでも人を凌いだ仕打しおうちな薬売は

流眄にかけて故とらしゆう私を通越して、すたすた前へ出て、ぬつと小山のような路の突先へ蝙蝠傘を差して立つたが、そのまま向うへ下りて見えなくなる。

その後から爪先上り、やがてまた太鼓の胴のような路の上へ体が乗つた、それなりにまた下りじや。

売薬は先へ下りたが立停つてしきりに四辺を睨みていてる様子、執念深く何か巧んだかと、快からず続いたが、さてよく見ると仔細があるわい。

路はここで二条になつて、一条はこれからすぐに坂になつてのぼりも急なり、草も両方から生茂つたのが、路傍のその角の処にある、それこそ四抱、そうさな、五抱もあるうといふ一本の檜の、背後へ蜿つて切出したような大巖が二ツ三ツ四ツと並んで、上方へ層なつてその背後へ通じてゐるが、私が見当をつ

けて、心組んだのはこつちではないので、やつぱり今まで歩いて来たその幅の広いなだらかな方が正しく本道、あと二里足らず行けば山になつて、それからが峠になるはず。

と見ると、どうしたことかさ、今いうその檜じやが、そこらに何もない路を横断つて見果のつかぬ田圃の中空へ虹のように突出している、見事な。根方の処の土が壊れて大鰻を捏ねたような根が幾筋ともなく露あらわされた、その根から一筋の水がさつと落ちて、地の上へ流れるのが、取つて進もうとする道の真中に流出してあたりは一面。

田圃が湖にならぬが不思議で、どうどうと瀬せになつて、前途に一叢の藪やぶが見える、それを境にしておよそ二町ばかりの間まるで川じや。礫はばらばら、飛石のようにひよいひよいと大跨おおまたで伝えそうにずっと見ごたえのあるのが、それでも人の手で並

べたに違ちがいはない。

もつとも衣服きものを脱いで渡るほどの大事おほなごとではないが、本街道にはちと難儀なんぎ過ぎて、なかなか馬などが歩行あゆかれる訳のものではないので。

売薬もこれで迷つたのであろうと思う内、切放きりはなれよく向むきを変えて右の坂ざかをすたすたと上りはじめた。見る間に檜ひを後に潜くぐり抜けると、私が体の上あたりへ出て下を向き、

（おいおい、松本まつもとへ出る路じはこつちだよ。）といつて無造作むぞうさにまた五六歩。

岩の頭かぶへ半身はんしんを乗出のして、

（茫然ばんやりしてると、木精こだまが攫さらうぜ、昼間ひまだつて容赦ようしゃはねえよ。）と嘲あざけるがごとく言い棄すてたが、やがて岩の陰かげに入つて高い処の草に隠かくれた。

しばらくすると見上げるほどな辺あたりへ蝙蝠傘の先が出たが、木の枝えだとすれすれになつて茂しげみの中に見えなくなつた。

(どツこいしょ)と暢氣のんきなかけ声で、その流の石の上を飛々とびとびに伝つて来たのは、莫蘿ござの尻当しりあてをした、何にもつけない天秤棒てんびんぼうを片手で担いだ百姓ひやくしよじや。」

五

「さつきの茶店ちゃみせからここへ来るまで、売薬の外は誰だれにも逢わなんだことは申上げるまでもない。

今別れ際ぎわに声を懸けられたので、先方むこうは道中の商売人と見ただけに、まさかと思つても氣迷きまよいがするので、今朝けさも立ちぎわによく見て來た、前にも申す、その図面をな、ここでも開けて見

ようとしていたところ。

(ちょいと伺いとう存じますが、)

(これは何でござりまする、)と山國の人などは殊に出家と見ることと丁寧にいつてくれる。

(いえ、お伺い申しますまでもございませんが、道はやつぱりこれを素直^{まっすぐ}に参るのでございましょうな。)

(松本へ行かつしやる? ああああ本道じや、何ね、この間の梅雨^{つゆ}に水が出て、とてつもない川さ出来たでがすよ。)

(まだずつとどこまでもこの水でございましょうか。)

(何のお前様、見たばかりじや、訳はござりませぬ、水になつたのは向うのあの藪までで、後はやつぱりこれと同一^{おなじ}道筋で山までは荷車が並んで通るでがす。藪のあるのは旧^{もと}大きいお邸^{やしき}の医者様の跡でな、ここいらはこれでも一つの村でがした、十三

年前の大水の時、から一面に野良になりましたよ、人死もいけえこと。ご坊様歩^{ぽうさま}ぎながらお念佛でも唱えてやつてくれさつしやい。)と問わぬことまで深切に話します。それでよく仔細が解^{わか}つて確^{たしか}になりはなつたけれども、現に一人踏迷^{ふみまよ}つた者がある。(こちらの道はこりやどこへ行くので)といつて売薬の入つた左手の坂を尋ねて見た。

(はい、これは五十年前までは人が歩^あ行いた旧道でがす。やつぱり信州へ出まする、先是一つで七里ばかり總体近うござりますが、いや今時^{いまどき}往来の出来るのじやあござりませぬ。去年もご坊様、親子連^{づれ}の巡礼^{じゅんらい}が間違えて入つたと^ひいうで、はれ大変な、乞食^{こじき}を見たような者じやと^ひいうて、人命に代りはねえ、追かけて助けべえと、巡查様^{おまわりさま}が三人、村の者が十二人、一組になつてこれから押登つて、やつと連れて戻^{もど}つたくらいでがす。ご坊

様も血気に逸つて近道をしてはなりましねえぞ、草臥れて野宿をしてからがここを行かつしやるよりはましでござるに。はい、氣を付けて行かつしやれ。)

ここで百姓に別れてその川の石の上を行こうとしたがふと猶予つたのは売薬の身の上で。

まさかに聞いたほどでもあるまいが、それが本当ならば見殺じや、どの道私は出家の体、日が暮れるまでに宿へ着いて屋根の下に寝るには及ばぬ、追着いて引戻してやろう。罷違うて旧道を皆歩行いても怪しゆうはあるまい、こういう時候じや、狼の旬でもなく、魑魅魍魎の汐さきでもない、ままよ、と思うて、見送ると早や深切な百姓の姿も見えぬ。

(よし。)

思切つて坂道を取つて懸つた、侠氣があつたのではござらぬ、

血氣に逸つたではもとよりない、今申したようではずつともう悟つたようじやが、いやなかなかの臆病者おくびょうもの、川の水を飲むのさえ気が怯けたほど生命いのちが大事で、なぜまたと謂わつしやるか。

ただ挨拶あいさつをしたばかりの男なら、私は実のところ、打棄うつちやつておいたに違ちがはないが、快からぬ人と思つたから、そのままで見棄てるのが、故わけとするようで、気が責めてならなんだから、」と宗朝はやはり俯向うつむけに床とこに入つたまま合掌がっしょうしていつた。

「それでは口でいう念佛にも済まぬと思うてさ。」

六

「さて、聞かつしやい、私はそれから檜ひのきの裏を抜けた、岩の下から岩の上へ出た、樹きの中を潜くぐつて草深い徑こみちをどこまでも、ど

こまでも。

するといつの間にか今上つた山は過ぎてまた一ツ山が近いて
来た、この辺あたりしばらくの間は野が廣々として、さつき通つた本
街道よりもつと幅の広い、なだらかな一筋道。

心持西と、東と、真中に山を一つ置いて二条並んだ路のよう
な、いかさまこれならば槍やりを立てても行列が通つたであろう。

この広ひろツ場ばでも目の及ぶ限り芥子粒けしつぶほどの大きさの壳薬おおきの姿も
見ないで、時々焼けるような空を小さな虫が飛び歩行いた。

歩行くにはこの方が心細い、あたりがぱつとしていると便たよりが
ないよ。もちろん飛驒越ひだごえと銘めいを打つた日には、七里に一軒十里
に五軒という相場、そこで粟あわの飯にありつけば都合じょうも上の方と
いうことになつております。それを覚悟かくごのことと、足は相応に
達者、いや屈くつせずに進んだ進んだ。すると、だんだんまた山が

両方から逼つて来て、肩に支えそうな狭いとこになつた、すぐ
に上^{のぼり}。

さあ、これからが名代^{なだい}の天生峠^{あもう}と心得たから、こつちもその
気になつて、何しろ暑いので、喘ぎながらまず草鞋^{わらじ}の紐^{ひも}を緊直^{しめなお}
した。

ちょうどこの上口^{のぼりぐち}の辺に美濃^{みの}の蓮大寺^{れんだいじ}の本堂の床下^{ゆかした}まで吹抜^{ふきぬ}
けの風穴^{かざあな}があるということを年経^{とした}つてから聞きましたが、なか
なかそこどころの沙汰^{さた}ではない、一生懸命^{いっしょくんめい}、景色^{けしき}も奇跡^{きせき}もある
ものかい、お天気さえ晴れたか曇つたか訳が解らず、目じろぎ
もしないですたすたと捏ねて上^{のぼり}る。

とお前様お聞かせ申す話は、これからじやが、最初に申す通
り路がいかにも悪い、まるで人が通いそうでない上に、恐しい
のは、蛇^{へび}で。両方の叢^{くさむら}に尾と頭とを突込んで、のたりと橋を渡

しているではあるまいか。

私は真先に出会した時は笠を被つて竹杖を突いたまま、はつと息を引いて膝を折つて坐つたて。

いやもう生得大嫌、嫌というより恐怖いのでな。

その時はまず人助けにずるずると尾を引いて、向うで鎌首を上げたと思うと草をさらさらと渡つた。

ようよう起上つて道の五六町も行くと、またおなじように、胴中を乾かして尾も首も見えぬのが、ぬたり！

あツというて飛退いたが、それも隠れた。三度目に出会つたのが、いや急には動かず、しかも胴体の太さ、たとい這出したところでぬらぬらとやられてはおよそ五分間ぐらい尾を出すまでに間があろうと思う長虫と見えたので、やむことをえず私は跨ぎ越した、とたんに下腹が突張つてぞツと身の毛、毛穴が残

らず鱗に變つて、顔の色もその蛇のようになつたろうと目を塞いだくらい。

絞るような冷汗になる氣味の悪さ、足が竦んだというて立つていられる数ではないからびくびくしながら路を急ぐとまたしても居たよ。

しかも今度のは半分に引切つてある胴から尾ばかりの虫じや、切口が蒼あおみを帶びてそれでこう黄色な汁しるが流れてぴくぴくと動いたわ。

我を忘れてばらばらとあとへ遁帰にげかえつたが、気が付けば例のがまだ居るであろう、たとい殺されるまでも二度とはあれを跨ぐ氣はせぬ。ああさつきのお百姓がものの間違まちがいでも故道ふるみちには蛇がこうといつてくれたら、地獄じごくへ落ちても来なかつたにと照りつけられて、涙なみだが流れた、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、今でもぞつとする。」と

額に手を。

七

「果が無いから肝を据えた、もとより引返す分ではない。旧の處にはやつぱり丈足らずの骸がある、遠くへ避けて草の中へ駆け抜けたが、今にもあとの半分が絡いつきそうで耐らぬから気脇がして足が筋張ると石に躡いて転んだ、その時膝節を痛めましたものと見える。

それからがくがくして歩行くのが少し難渋になつたけれども、ここで倒れては温氣で蒸殺されるばかりじやと、我身で我身を激まして首筋を取つて引立てるようにして峠の方へ。
何しろ路傍の草いきれが恐しい、大鳥の卵見たようなものな

んぞ足許あしもとにごろごろしている茂り塩梅あんぱい。

また二里ばかり大蛇おろちの蜿うねるような坂を、山懷やまぶところに突當つきあたつて岩角を曲つて、木の根を繞めぐつて参つたがここのこと餘りの道じやつたから、參謀さんぼう本部の絵図面を開いて見ました。

何やつぱり道はおんなじで聞いたにも見たのにも變かわりはない、旧道はこちらに相違はないから心遣こころやりにも何にもならず、もとより歴れつきとした図面というて、描かいてある道はただ栗くりの毬いがの上へ赤い筋が引張つてあるばかり。

難儀なんぎさも、蛇も、毛虫も、鳥の卵も、草いきれも、記してあるはずはないのじやから、さつぱりと畳たたんで懷ふところに入れて、うむとこの乳の下へ念佛を唱え込んで立直つたはよいが、息も引かぬ内に情無い長虫が路を切つた。

そこでもう所詮叶しよせんかなわぬと思つたなり、これはこの山の靈れいであ

ろうと考えて、杖を棄てて膝を曲げ、じりじりする地に両手をついて、

（誠に済みませぬがお通しなすつて下さりまし、なるたけお午睡の邪魔になりませぬようそつと通行いたします。）

ご覧の通り杖も棄てました。）と我折れしみじみと頼んで額を上げるとざつという凄じい音で。

心持よほどの大蛇と思つた、三尺、四尺、五尺四方、一丈余、だんだんと草の動くのが広がつて、傍の溪へ一文字にさつと靡いた、果は峰も山も一齊に揺いだ、恐毛を震つて立竦むと涼しさが身に染みて、気が付くと山嵐よ。

この折から聞えはじめたのはどつという山彦に伝わる響、ちょうど山の奥に風が渦巻いてそこから吹起る穴があいたように感じられる。

何しろ山靈感應あつたか、蛇は見えなくなり暑さも凌ぎよくなつたので、氣も勇み足も摃取つたが、ほどなく急に風が冷たくなつた理由を会得することが出来た。

というのは目の前に大森林があらわれたので。

世の譬たとえにも天生峠あもうは蒼空あおぞらに雨が降るという、人の話にも神代そまから杣そまが手を入れぬ森があると聞いたのに、今まで余り樹がなさ過ぎた。

今度は蛇のかわりに蟹かにが歩きそうで草鞋わらじが冷えた。しばらくすると暗くなつた、杉、松、榎と処々見分けが出来るばかりに遠い処から幽かすかに日の光の射すあたりでは、土の色が皆黒い。中には光線が森を射通す工合いとおであろう、青だの、赤だの、ひだが入つて美しい処があつた。

時々爪尖つまさきに絡まるのは葉の雪しづくの落溜おちたまつた糸のような流ながれで、こ

れは枝を打つて高い処を走るので。ともするとまた常磐木ときわぎが落葉する、何の樹とも知れずばらばらと鳴り、かさかさと音がしてぱつと檜笠ひのきがさにかかることがある、あるいは行過ぎた背後うしろへこぼれるものある、それ等は枝から枝に溜たまつていて何十年ぶりではじめて地の上まで落ちるのか分らぬ。」

八

「心細さは申すまでもなかつたが、卑怯ひきようなようでも修行の積まぬ身には、こういう暗い処の方がかえつて觀念に便たよりがよい。何しろ体が凌しのぎよくなつたために足の弱よわりも忘れたので、道も大きに摶取はかどつて、まずこれで七分は森の中を越したろうと思う処で五六尺天窓あたまの上らしかつた樹の枝から、ぼたりと笠の上へ落ち

留まつたものがある。

鉛の錘かとおもう心持、何か木の実でもあるかしらんと、二三度振つてみたが附着いていてそのままには取れないから、何心なく手をやつて掴むと、滑らかに冷りと来た。

見ると海鼠を裂いたような目も口もない者じやが、動物には違ひない。不気味で投出そうとするすると辺つて指の尖へ吸ついてぶらりと下つた、その放れた指の尖から真赤な美しい血が垂々と出たから、吃驚して目の下へ指をつけてじつと見ると、今折曲げた肱の処へつるりと垂懸つてしているのは同形をした、幅が五分、丈が三寸ばかりの山海鼠。

呆気に取られて見る見る内に、下の方から縮みながら、ぶくぶくと太つて行くのは生血いきちをしたたかに吸込むせいで、濁つた黒い滑らかな肌に茶褐色の縞ちゃかつしょくしまをもつた、疣胡瓜のような血を取

る動物、こいつは蛭ひるじやよ。

誰たが目にも見違えるわけのものではないが、団抜はずぬけて余り大きいからちよつとは気がつかぬであつた、何の畠はたけでも、どんな履歴りれきのある沼ぬまでも、このくらいな蛭ひるはあろうとは思われぬ。

肱ひじをばさりと振ふるつたけれども、よく喰くい込んだと見えてなかなか放れそうにしないから不氣味ぶきみながら手で抓つまんで引切ると、ふつりといつてようよう取れる、しばらくも耐たまつたものではない、突然取いきなりつて大地へ叩たたきつけると、これほどの奴等やつらが何万となく巣わをくつて我わものにしていようという処、かねてその用意はしていると思われるばかり、日のあたらぬ森の中の土は柔やわらかい、潰つぶれそうにもないのじや。

ともはや頸えりのあたりがむずむずして來た、平手ひらてで扱こいて見ると横撫よこなでに蛭せなの背せをぬるぬるとすべるという、やあ、乳の下ひそへ潜ひそん

で帯の間にも一疋^{ぴき}、蒼^{あお}くなつてそツと見ると肩の上にも一筋。

思わず飛上つて総身^{そうしん}を震いながらこの大枝の下を一散にかけぬけて、走りながらまづ心覚えの奴だけは夢中^{むちゅう}でもぎ取つた。何にしても恐しい今の枝には蛭^なが生^なつてゐるのであろうとあまりの事に思つて振返ると、見返つた樹の何の枝か知らずやつぱり幾^{いく}つといふこともない蛭の皮じや。

これはと思う、右も、左も、前の枝も、何の事はないまるで充满^{いっぱい}。

私は思わず恐怖^{きょうふ}の声を立てて叫んだ、すると何と？ この時

は目に見えて、上からぼたりぼたりと真黒な瘦^やせた筋の入つた雨が体へ降かかつて來たではないか。

草鞋^{くつ}を穿いた足の甲^{こう}へも落ちた上へまた累^{かさな}り、並んだ傍^{わき}へまた附着^{くつき}いて爪先^{つまさき}も分らなくなつた、そして活きてると思うだ

け脈を打つて血を吸うような、思いなしか一つ一つ伸縮をする
ようなのを見るから気が遠くなつて、その時不思議な考えが起
きた。

この恐しい山蛭は神代の古からここに屯たむろをしていて、人の来るのを待ちつけて、永い久しい間にどのくらい何斛かの血を吸うと、そこでこの虫の望のぞみが叶かなう、その時はありつたけの蛭が残らず吸つただけの人間の血を吐はきだ出すと、それがために土がとけて山一つ一面に血と泥との大沼にかかるであろう、それと同時にここに日の光を遮ささえぎつて昼もなお暗い大木が切々に一つ一つ蛭になつてしまふのに相違ないと、いや、全くの事で。」

「およそ人間が滅びるのは、地球の薄皮うすかわが破れて空から火ひが降ふるのでもなれば、大海おほつかぶが押被おつかぶさるのでもない、飛驒國ひだのくにの樹林きばやしが蛭ひになるのが最初で、しまいには皆血みんなと泥みのの中に筋の黒い虫むしが泳ぐ、それが代だいがわりの世界よのなかであろうと、ぼんやり。

なるほどこの森も入口では何の事もなかつたのに、中へ来るところの通り、もつと奥深く進んだら早はや残らず立樹たちきの根の方から朽くちて山蛭さんひになつていよう、助かるまい、ここで取殺とりとされる因縁いんねんらしい、取留めのない考えが浮んだのも人が知死期ちしこに近ちかづいたからだとふと気が付いた。

どの道死ぬるものなら一足でも前へ進んで、世間の者が夢ゆめにも知らぬ血と泥の大沼の片端かたはしでも見ておこうと、そう覚悟かくごがきまつては氣味の悪いも何もあつたものじやない、体中珠じゅず数生なりになつたのを手当てあたり次第に搔かい除ぬけ拂むしり棄すて、抜き取りなどして、

手を挙げ足を踏んで、まるで躍り狂う形で歩行^{おどる}き出した。

はじめの中は一廻^{ういち}も太つたように思われて痒さが耐らなかつたが、しまいにはげつそり痩せたと感じられてずきずき痛んでならぬ、その上を容赦なく歩^{ようしゃ}行^あく内にも入交りに襲^{おそ}いおつた。既に目も眩んで倒れそうになると、禍^{わざわい}はこの辺が絶頂であつたと見えて、隧道^{トンネル}を抜けたように、遙^{はるか}に一輪のかすれた月を拝んだのは、蛭の林の出口なので。

いや蒼空^{あおぞら}の下へ出た時には、何のことも忘れて、碎^{くだ}ける、微塵^{みじん}になれと横なぐりに体を山路^{やまじ}へ打倒^{うちたお}した。それでからもう砂利^{じやり}でも針でもあれと地^{づち}へこすりつけて、十余りも蛭の死骸^{しがい}を引くりかえした上から、五六間^{けん}向うへ飛んで身顫^{みぶるい}をして突立^{つった}った。人を馬鹿^{ばか}にしているではありませんか。あたりの山では処々^{ところどころ}茅蜩殿^{ひぐらしどの}、血と泥の大沼になろうという森を控^{ひか}えて鳴いている、

日は斜ななめ、渓底たにそこはもう暗おとこまい。

まずこれならば狼の餌食になつてもそれは一思ひとおもいに死なれるからと、路はちようどだらだら下おりなり、小僧さん、調子はずれに竹の杖を肩にかついで、すたこら遁にげたわ。

これで蛭に悩まされて痛いのか、痒いのか、それとも擦くすぐつたいのか得えもいわれぬ苦しみさえなかつたら、嬉うれしさに独り飛驒山越ひだやまごえの間道かんどうで、お経きょうに節あしをつけて外道踊げどうおどりをやつたであろう、ちよつと清心丹せいしんたんでも噛碎かみくだいて疵口きずぐちへつけたらどうだと、だいぶ世の中の事に気がついて來たわ。抓つかつても確に活返いきかえつたのじやが、それについて富山の薬壳はどうしたろう、あの様子ようすではとうに血になつて泥沼きさなに。皮ばかりの死骸は森の中の暗い処、おまけに意地の汚きさない下司げすな動物が骨までしゃぶろうと何百きづかいという数でのしかかつていた日には、酢すをぶちまけても分る気遣はあるまい。

こう思つてゐる間、件くだんのだらだら坂は大分長かつた。

それを下り切ると流が聞えて、とんだ処に長さ一間ばかりの土橋がかかつてゐる。

はやその谷川の音を聞くと我身で持余す蛭の吸殻を真逆に投込んで、水に浸したらさぞいい心地であろうと思うくらい、何の渡りかけて壊れたらそれなりけり。

危いとも思わずはずつと懸かる、少しぐらぐらしたが難なく越した。向うからまた坂じや、今度は上りき、ご苦労千万。』

十

「とてもこの疲れようでは、坂を上るわけには行くまいと思つたが、ふと前途に、ヒインと馬の嘶くのが駆けて聞えた。

馬士ましが戻もどるのか小荷駄こにだが通るか、今朝一人の百姓に別れてから時の経つたは僅わずかじやが、三年も五年も同一ものをいう人間とは中を隔へだてた。馬が居るようではともかくも人里に縁があると、これがために気が勇んで、ええやつと今一揉ひともみ。

一軒の山家やまがの前へ来たのには、さまで難儀なんぎは感じなかつた。夏のことで戸障子のしまりもせず、殊に一軒家こと、あけ開いたなり門といつてもない、突然破縁いきなりやれえんになつて男が一人、私はもう何の見境もなく、

(頼たのみます、頼たのみます)というさえ助たすけを呼ぶような調子で、取縋とりすがらぬばかりにした。

(ご免めんなさいまし)といつたがものもいわない、首筋くびをぐつたりと、耳を肩で塞ふさぐほど顔を横にしたまま小兒こどもらしい、意味のない、しかもぼつちりした目で、じろじろと門に立つたものを

瞻める、その瞳を動かすさえ、おつくうらしい、氣の抜けた身の持方。裾短かで袖は脇より少い、糊氣のある、ちやんちやんを着て、胸のあたりで紐で結えたが、一つ身のものを着たように出ツ腹の太り肉、太鼓を張つたくらいに、すべすべとふくれてしかも出臍でべそという奴、南瓜かぼちゃの蒂へたほどな異形な者を片手でいじくりながら幽靈ゆうれいの手つきで、片手を宙にぶらり。

足は忘れたか投出した、腰がなくば暖簾のれんを立てたように畳たたまれそうな、年紀としがそれでいて二十三、口をあんぐりやつた上唇うわくちびるで巻込めよう、鼻の低さ、出額でびたい。五分刈ごぶがりの伸びたのが前は鷄冠ときかのごとくなつて、頸脚えりあしへ撥ねて耳に被かぶさつた、啞おしか、白痴ぱかか、これから蛙かえるになろうとするような少年。私は驚いた、こつちの生命いのちに別条はないが、先方様さきさまの形相ぎょうそう。いや、大別条おおべつじょう。

(ちよいとお願ひ申します。)

それでもしかたがないからまた言葉をかけたが少しも通ぜず、
ばたりといふと僅に首の位置をかえて今度は左の肩を枕にした、
口の開いてること旧のことし。

こういうのは、悪くすると突然ふんづかまえて臍を捻りながら返事のかわりに嘗めようも知れぬ。

私は一足退さきつたが、いかに深山だといつてもこれを一人で置くという法はあるまい、と足を爪立つまだてて少し声高こわだかに、
(どなたぞ、ご免なさい)といつた。

背戸せどと思うあたりで再び馬の嘶いななく声。

(どなた)と納戸なんどの方でいったのは女じやから、南無三宝、この白い首には鱗うろこが生えて、体は床ゆかを這はつて尾をずるずると引いて出ようと、また退ささつた。

(おお、お坊様ぼうさま)と立顯たちあらわれたのは小造こづくりの美しい、声も清すずしい、

ものやさしい。

私は大息を吐いて、何にもいわず、

(はい。)と頭を下げるよ。

婦人は膝をついて坐つたが、前へ伸上がるようにして、

黄

昏に

しょんぼり立つた私が姿を透かして見て、

(何か用でござんすかい。)

休めともいわずはじめから宿の常世は留守らしい、人を泊めないときめたもののように見える。

いい後れてはかえつて出そびれて頼むにも頼まれぬ仕誼にも

なることと、つかつかと前へ出た。

丁寧に腰を屈めて、

(私は、山越で信州へ参ります者ですが旅籠のございます処ま
ではまだどのくらいでございましょう。)

十一

(あなたまだ八里余^{あまり}でございますよ。)

(その他に別に泊めてくれます家^{うち}もないのでしょうか。)

(それはございません。)といいながら目^またたきもしないで清^{すず}し
い目^まで私の顔をつくづく見ていた。

(いえもう何でござります、実はこの先一町行け、そうすれば
上段の室^{へや}に寝かして一晩扇^{あお}いでいてそれで功德^{くどく}のためにする家
があると承^{うけたまわ}りましても、全くのところ一足も歩行^{ある}けますのでは
ございません、どこの物置^{ものおき}でも馬小屋^{すみ}の隅^{すみ}でもよいのでござい
ますから後生^{ごじょう}でござります。)とさつき馬が嘶^{いなな}いたのは此家^{ここ}
外にはないと思つたから言つた。

婦人はしばらく考えていたが、ふと傍を向いて布の袋を取つて、膝のあたりに置いた桶の中へざらざらと一幅、水を溢すよう에게て縁をおさえて、手で掬つて俯向いて見たが、

（ああ、お泊め申しましよう、ちょうど炊いてあげますほどお米もございますから、それに夏のことで、山家は冷えましても夜のものにご不自由もござんすまい。さあ、ともかくもあなた、お上り遊ばして。）

というと言葉の切れぬ先にどつかと腰を落した。婦人はつと身を起して立つて来て、

（お坊様、それでござんすがちょっとお断り申しておかねばなりません。）

はつきりいわれたので私はびくびくもので、
（はい、はい。）

(いいえ、別のことじやござんせぬが、私は癖として都の話を聞くのが病やまいでございます、口に蓋ふたをしておいでなさいましても無理やりに聞こうといたしますが、あなた忘れてもその時間かして下さいますな、ようござんすかい、私は無理にお尋たずね申します、あなたはどうしてもお話しなさいませぬ、それを是非にと申しましても断たつておつしやらないようにきつと念を入れておきますよ。)

と仔細しざいありげなことをいつた。

山の高さも谷の深さも底の知れない一軒家の婦人おんなの言葉とは思おもうたが保つにむずかしい戒かいでもなし、私はただ頷うなずくばかり。(はい、よろしゅうございます、何事もおつしやりつけは背そむきますまい。)

婦人おんなは言下ごんかに打解うちとけて、

(さあさあ汚うございますが早くこちらへ、お寛ぎなさいまし、
そうしてお洗足を上せんそくげましようかえ。)

(いえ、それには及びませぬ、雑巾ぞうきんをお貸し下さいまし。ああ、
それからもしそそのお雑巾次手ついでにずつぶりお絞しばんなすつて下さる
と助たすかります、途中とちゅうで大変な目に逢あいましたので体うつちやりを打棄うちりたい
ほど氣味が悪うござりますので、一いツ背中ふを拭ぬぐこうと存じます
が、恐おそれいりますな。)

(そう、汗あせにおなりなさいました、さぞまあ、お暑うござんし
たでしよう、お待ちなさいまし、旅籠はたごへお着き遊ばして湯にお
入りなさいますが、旅するお方には何よりご馳走ちそうだと申しま
すね、湯どころか、お茶さえ碌ろくにおもてなしもいたされません
が、あの、この裏の崖がけを下りますと、綺麗きれいな流ながれがござりますから
いつそれへいらっしゃつてお流しがよろしゅうございましょ

う。)

聞いただけでも飛んでも行きたい。

(ええ、それは何より結構でございますな。)

(さあ、それではご案内申しますよう、どれ、ちょうど私も米を磨ぎに参ります。) と件の桶を小脇に抱えて、縁側から、藁草履を穿いて出たが、屈んで板縁の下を覗いて、引出したのは一足の古下駄で、かちりと合して埃を払いて揃えてくれた。

(お穿きなさいまし、草鞋はここにお置きなすつて、)
私は手をあげて、一礼して、

(恐入ります、これはどうも、)

(お泊め申すとなりましたら、あの、他生の縁とやらでござんす、あなたご遠慮を遊ばしますなよ。) まず恐しく調子がいいじやて。」

「（さあ、私に跟いてこちらへ、）と件の米磨桶を引抱えて手拭を細い帯に挟んで立つた。

髪は房りとするのを束ねてな、櫛をはさんで簪で留めている、その姿の佳さというてはなかつた。

私も手早く草鞋を解いたから、早速古下駄を頂戴して、縁から立つ時ちよいと見ると、それ例の白痴殿じや。

同じく私が方をじろりと見たつけよ、舌不足が饒舌るような、愚にもつかぬ声を出して、

（姉や、こえ、こえ。）といいながら氣だるそうに手を持上げてその蓬々と生えた天窓を撫でた。

高野聖

(坊さま、坊さま?)

すると婦人おんなが、下しもぶくれな顔にえくぼを刻んで、三ツばかりはきはきと続けて頷いた。

少年はうむといつたが、ぐたりとしてまた臍へそをくりくりくり。私は余り氣の毒さに顔も上げられないでそつと盜むようにして見ると、婦人おんなは何事も別に気に懸けてはおらぬ様子、そのまゝ後へ跟ついて出ようとする時、紫陽花あじさいの花の蔭かげからぬいと出た一名の親仁おやじがある。

背戸せどから廻つて來たらしい、草鞋はを穿いたなりで、胴亂どうらんの根付ねつけを紐長ひもながにぶらりと提さげ、銜煙管くわえぎせるをしながら並んで立停たちどまつた。

(和尚様おしょうようおいでなさい。)

婦人おんなはそなたを振向いて、

(おじ様どうでござんした。)

(さればさの、頓馬^{とんま}で間の抜けたというのはあることかい。根ツから早や狐^{きつね}でなければ乗せ得そうにもない奴^{やつ}じやが、そこはおらが口じや、うまく仲人^{なこうど}して、二月や三月はお嬢様^{みつき}がご不自由^{じょうさま}のねえように、翌日^{あす}はものにしてうんとここへ担ぎ込みます。)（お頼み申しますよ。）

(承知、承知、おお、嬢様どこさ行かつしやる。)
(崖の水までちよいと。)

(若い坊様連れて川へ落っこちさつしやるな、おらここに眼張^{がんぱ}つて待つとるに、)と横様^{よこざま}に縁にのさり。

(貴僧^{あなた}、あんなことを申しますよ。)と顔を見て微笑^{ほほえ}んだ。
(一人で参りましょう、)と傍^{わき}へ退くと、親仁^{おやじ}はくつくつと笑つて、

(はははは、さあ、早くいってござらつせえ。)

(おじ様、今日はお前、珍しいお客様がお一方ござんした、こういう時はあとからまた見えようも知れません、次郎さんばかりでは来た者が弱んなさろう、私が帰るまでそこに休んでいておくれでないか。)

(いいともの。)といいかけて、親仁は少年の傍そばへにじり寄つて、鉄挺かなでこを見たような拳こぶしで、背中をどんどんくらわした、白痴ぱかの腹はだぶりとして、べそをかくような口つきで、にやりと笑う。

私はぞつとして面おもてを背けたが、婦人おんなは何気なにげない体ていであつた。親仁は大口を開いて、

(留守におらがこの亭主を盗むぞよ。)

(はい、ならば手柄てがらでござんす、さあ、貴僧あなた参りましようか。)背後うしろから親仁が見るよう思つたが、導かるるままに壁かべについて、かの紫陽花のある方ではない。

やがて背戸と思う処で左に馬小屋を見た、ことことという音
は羽目はめを蹴けるのであろう、もうその辺から薄暗くなつて来る。
(貴僧あなた、ここから下りるのでござります、辻りはいたしませぬ
が、道が酷ひどうございますからお静しづかに) と。」

十三

「そこから下りるのだと思われる、松の木の細くツテ度外れに
背の高い、ひよろひよろしたおよそ五六間上までは小枝一つも
ないのがある。その中を潜くつたが、仰あおぐと梢こずえに出て白い、月の
形はここでも別にかわりは無かつた、浮世うきよはどこにあるか十三
夜で。

先へ立つた婦人おんなの姿が目さきを放れたから、松の幹みきに掴つかまつ

て覗くと、つい下に居た。

仰向いて、

(急に低くなりますから気をつけて。こりや貴僧には足駄では無理でございましたかしら、宜しくば草履とお取交え申しましよう。)

立後たちおくれたのを歩行あるきなや悩んだと察した様子、何がさて転げ落ちても早く行つて蛭ひるの垢あかを落したさ。

(何、いけませんければ跣足はだしになります分のこと、どうぞお構いなく、嬢様にご心配をかけては済みません。)

(あれ、嬢様ですつて) とやや調子を高めて、艷麗あでやかに笑つた。(はい、ただいまあの爺様じいさんが、さよう申しましたように存じますが、夫人おくさまでござりますか。)

(何にしても貴僧には叔母おばさんくらいな年紀としですよ。まあ、お

早くいらっしゃい、草履もようござんすけれど、刺とげがささりますといけません、それにじくじく湿ぬれていてお氣味が悪うございましょうから。)と向う向むきでいいながら衣服きものの片棊かたつまをぐいとあげた。真白なのが暗やみまぎれ、歩行あるくと霜しもが消えて行くような。ずんずんずんずんと道を下りる、傍かたわらの叢くさむらから、のさのさと出たのは墓ひきで。

(あれ、氣味が悪いよ。)といふと婦人おんなは背後うしろへ高々と踵かかとを上げて向うへ飛んだ。

(お客様がいらっしゃるではないかね、人の足になんか搦からまつて、贅沢ぜいたくじやあないか、お前達は虫を吸つていればたくさんだよ。

貴僧あなたすんすんいらっしゃいましな、どうもしはしません。こう云う處ですからあんなものまで人懷なつかしゅうございます、厭いやじや

ないかね、お前達と友達をみたようで愧しい、あれいけませんよ。)

墓はのさのさとまた草を分けて入つた、婦人^{おんな}はむこうへずいと。

(さあこの上へ乗るんです、土が柔かで壊えますから地面は歩行^{ある}
かれません。)

いかにも大木の僵^{たお}れたのが草がくれにその幹をあらわしてい
る、乗ると足駄穿^{あしだばき}で差支えがない、丸木だけれどもおそろしく
太いので、もつともこれを渡り果てるとたちまち流^{ながれ}の音が耳に
激^{げき}した、それまでにはよほどの間^{あいだ}。

仰いで見ると松の樹^きはもう影も見えない、十三夜の月はずつ
と低うなつたが、今下りた山の頂^{いただき}に半ばかかつて、手が届きそ
うにあざやかだけれども、高さはおよそ計り知られぬ。

(貴僧、こちらへ。)

といつた婦人はもう一息、目の下に立つて待つていた。

そこは早や一面の岩で、岩の上へ谷川の水がかかつてここに
よどみを作つてゐる、川幅は一間ばかり、水に臨めば音はさま
でにもないが、美しさは玉を解いて流したよう、かえつて遠く
の方で凄じく岩に碎ける響がする。

向う岸はまた一座の山の裾で、頂の方は真暗まっくらだが、山の端から
その山腹を射る月の光に照し出された辺あたりからは大石小石、巻螺まきら
のようなの、六尺角に切出したの、剣つるぎのようなのやら、鞠まりの形を
したのやら、目の届く限り残らず岩で、次第に大きく水に蘸ひたつ
たのはただ小山のよう。」

「（いい塩梅に今日は水がふえておりますから、中へ入りませんでもこの上でようございます。）と甲を浸して爪先を屈めながら、雪のような素足で石の盤の上に立つていた。

自分達が立つた側は、かえつてこつちの山の裾が水に迫つて、ちょうど切穴の形になつて、そこへこの石を嵌めたような眺川上も下流も見えぬが、向うのあの岩山、九十九折のような形、流は五尺、三尺、一間ばかりずつ上流の方がだんだん遠く、飛々に岩をかがつたように隠見して、いすれも月光を浴びた、銀の鎧の姿、目のあたり近いのはゆるぎ糸を捌くがごとく真白に翻つて。

（結構な流れでございますな。）

（はい、この水は源が滝でございます、この山を旅するお方は皆み

な大風のような音をどこかで聞きます。貴僧はこちらへいらつしやる道でお心着きはなさいませんかい。)

さればこそ山蛭の大藪へ入ろうという少し前からその音を。

(あれは林へ風の当るのではございませんので?)

(いえ、誰なれでもそう申します、あの森から三里ばかり傍道わきみちへ入りました処に大滝があるのでございます、それはそれは日本一だそうですが、路みちが嶮けわしゅうござんすので、十人に一人参つたものはございません。その滝が荒あれましたと申しまして、ちょうど今から十三年前、恐おそろしい洪水おおみずがございました、こんな高い処まで川の底になりましてね、麓ふもとの村も山も家も残らず流れてしましました。この上の洞かみほらも、はじめは二十軒ばかりあつたのでござんす、この流れもその時から出来ました、ご覧なさいまし、この通り皆な石が流れたのでござりますよ。)

婦人はいつかもう米を精げ果てて、衣紋の乱れた、乳の端もほの見ゆる、膨らかな胸を反して立つた、鼻高く口を結んで目を恍惚と上を向いて頂を仰いだが、月はなお半腹のその累々たる巖を照すばかり。

(今でもこうやつて見ますと恐いようでございます。)と屈んで一二の腕の処を洗つていると。

(あれ、貴僧、そんな行儀のいいことをしていらしつてはお召が濡れます、氣味が悪うござりますよ、すっぱり裸体になつてお洗いなさいまし、私が流して上げましょう。)

(いえ、)

(いえじやあござんせぬ、それ、それ、お法衣の袖が浸るではありませんか、)とすると突然背後から帶に手をかけて、身悶をして縮むのを、邪慳らしくすっぱり脱いで取つた。

私は師匠が厳しかつたし、経を読む身体じや、肌さえ脱いだことはついぞ覚えぬ。しかも婦人の前、蝸牛が城を明け渡したようで、口を利くさえ、まして手足のあがきも出来ず、背中を円くして、膝を合せて、縮かまると、婦人は脱がした法衣を彼らの枝へふわりとかけた。

(お召はこうやつておきましょ、さあお背せなを、あれさ、じつとして。お嬢様とおつしやつて下さいましたお礼に、叔母さんが世話を焼くのでござんす、お人の悪い。)といつて片袖を前歯で引上げ、玉のような二の腕をあからさまに背中に乗せたが、じつと見て、

(まあ、)

(どうかいたしておりますか。)
(痣のようになつて、一面に。)

(ええ、それでござります、酷い目に逢いました。) 思い出してもぞつとするて。」

十五

「婦人おんなは驚いた顔をして、

(それでは森の中で、大変でござりますこと。旅をする人が、
飛騨ひだの山では蛭が降るというのはあすこでござんす。貴僧あなたは拔
道をご存じないから正面まともに蛭の巣をお通りなさいましたのでござ
りますよ。お生命いのちも冥加みょうがなくらい、馬でも牛でも吸い殺すの
でござりますもの。しかし疼うずくようにお痒かゆいのでござんしよう
ね。)

(ただいまではもう痛みますばかりになりました。)

(それではこんなものでこすりましては柔かいお肌が擦剥けま
しょう。) と、いうと手が綿のように障つた。

それから両方の肩から、背、横腹、臀、さらさら水をかけて
はさすつてくれる。

それがさ、骨に通つて冷たいかというとそうではなかつた。
暑い時分じやが、理窟をいうところではあるまい、私の血が沸
いたせいか、婦人の温氣か、手で洗つてくれる水がいい工合に
身に染みる、もつとも質の佳い水は柔かじやそくな。

その心地の得もいわれなさで、眠気がさしたでもあるまいが、
うとうとする様子で、疵の痛みがなくなつて気が遠くなつて、
ひとつ附つてゐる婦人の身体で、私は花びらの中へ包まれた
ような工合。

山家の者には肖合わぬ、都にも希な器量はいうに及ばぬが弱々
やまが にあ やわら すりむ
まる まれ ぐわら いしき
おんなん ぬくみ
たち ぐあい
え
ここち
きず
おんなん
わし
さわら

しそうな風采じや、背中を流す中にもはツはツと内証で呼吸がはずむから、もう断ろう断ろうと思いながら、例の恍惚で、気はつきながら洗わした。

その上、山の氣か、女の香か、ほんのりと佳い薰がする、私は背後でつく息じやろうと思つた。』

上人はちよつと句切つて、

「いや、お前様お手近ぢや、その明を搔き立つてもらいたい、暗いと怪しからぬ話じや、ここらから一番野面で遣つけよう。』

枕まくらを並べた上人の姿も朧おぼろげに明あかりは暗くなつていた、早速燈心とうしん

を明くすると、上人は微笑ほほえみながら続けたのである。

「さあ、そうやつていつの間にやら現とも無しに、こう、その不思議な、結構な薰のする暖あつたかい花の中へ柔かに包まれて、足、腰、手、肩、頸えりから次第しだいに天窓あたままで一面に被かぶつたから吃驚びっくり、石

に尻餅を搗いて、足を水の中に投げ出したから落ちたと思うと
たんに、女の手が背後から肩越しに胸をおさえたのでしつかり
つかまつた。

(貴僧あなた、お傍そばに居て汗臭あせくそうはござんせぬかい、とんだ暑がりな
んでございますから、こうやつておりましてもこんなでござい
ますよ。) という胸にある手を取つたのを、慌あわてて放して棒のよ
うに立つた。

(失礼、)

(いいえ誰も見ておりはしませんよ。) と澄すまして言う、婦人おんなもい
つの間にか衣服きものを脱いで全身を練絹ねりぎぬのように露あらわしていたのじや。
何と驚おどろくまいことか。

(こんなに太つておりますから、もうお愧はずかしいほど暑いのでござ
います、今時は毎日二度も三度も来てはこうやつて汗を流しま

す、この水がございませんかつたらどういたしましよう、貴僧あなた、
お手拭てぬぐい。）といつて絞しぼったのを寄越よこした。

（それでおみ足をお拭ふきなさいまし。）

いつの間にか、体はちゃんと拭いてあつた、お話し申すも恐おそれ多いが、はははははは。」

十六

「なるほど見たところ、衣服きものを着た時の姿とは違ちがうて肉つきの豊な、ふつくりとした膚はだえ。

（さつき小屋へ入つて世話をしましたので、ぬらぬらした馬の鼻息が体中にかかるて氣味が悪うござんす。ちょうどようございますから私も体を拭きましよう。）

と姉弟が内端話をするような調子。手をあげて黒髪をおさえながら腋の下を手拭でぐいと拭き、あとを両手で絞りながら立つた姿、ただこれ雪のようなのをかかる靈水で清めた、こういう女の汗は薄紅になつて流れよう。

ちょいちょいと櫛を入れて、

(まあ、女がこんなお転婆てんぱをいたしまして、川へ落おちこちたらどうしよう、川下かわしもへ流れて出ましたら、村里の者が何といつて見ましようね。)

(白桃しろももの花だと思います。)とふと心付いて何の気もなしにいうと、顔が合うた。

すると、さも嬉しそうに莞爾にっこりしてその時だけは初々しゅう年紀ういういも七ツ八ツ若やぐばかり、処女の羞はじを含んで下ふくを向いた。

私はそのまま目を外らしたが、その一段の婦人の姿が月を浴おんなわせ

びて、薄い煙に包まれながら向う岸の※に濡れて黒い、滑かな大きな石へ蒼味あおみを帶びて透通つて映るよう見えた。

するとね、夜目で判然はつきりとは目に入らなんだが地体何でも洞穴ほらあながあると見える。ひらひらと、こちらからもひらひらと、ものの鳥ほどはあろうという大蝙蝠おおこうもりが目を遮つた。

(あれ、いけないよ、お客様があるじゃないかね。)

不意を打たれただよに叫んで身悶えみもだをしたのは婦人おんな。

(どうかなさいましたか)もうちゃんと法衣ころもを着たから気丈夫きじょうぶに尋ねる。

(いいえ、)

といつたばかりできまりが悪そうに、くるりと後向うしろむきになつた。

その時小犬ほどの鼠色ねずみいろの小坊主こぼうずが、ちよこちよことやつて来て、あなやと思うと、崖がけから横に宙をひよいと、背後うしろから婦人おんなの背中はだかへぴつたり。

裸体はだかの立姿は腰から消えたようになつて、抱だきついたものがある。

(畜生ちくしょう、お客様お客様が見えないかい。)

と声に怒いかりを帶びたが、

(お前達は生意氣なまいきだよ) と激しくいいさま、腋の下から覗のぞこうとした件の動物の天窓あたまを振り返りさまにくらわしたで。

キツキツといて奇声を放つた、件の小坊主はそのまま後飛うしろとびにまた宙を飛んで、今まで法衣ころもをかけておいた、枝の尖さきへ長い手で釣つるし下さがつたと思うと、くるりと釣瓶覆つるべがえしに上へ乗つて、それなりさらさらと木登きのぼりしたのは、何と猿さるじやあるまいか。

枝から枝を伝うと見えて、見上げるようないい木の、やがて梢まで、かさかさがさり。

まばらに葉の中を透して月は山の端を放れた、その梢のあたり。

婦人はものに拗ねたよう、今の悪戯、いや、毎々、墓と蝙蝠と、お猿で三度じや。

その悪戯に多く機嫌を損ねた形、あまり子供がはしやぎ過ぎると、若い母様には得てある図じや。

本当に怒り出す。

といつた風情で面倒臭そうに衣服を着ていたから、私は何にも問わずに小さくなつて黙つて控えた。」

「優しいなかに強みのある、気軽に見えてもどこにか落着のあ
 る、馴々なれなれしくて犯し易からぬ品のいい、いかなることにもいざ
 となれば驚くに足らぬという身に応こたえのあるといつたような風の
 婦人おんな、かく嬌瞋きょうしんを発してはきつといいことはあるまい、今この
 婦人おんなに邪慳じゃけんにされては木から落ちた猿同然じやと、おつかなびつ
 くりで、おずおず控えていたが、いや案するより産うむが安い。
 （貴僧あなた、さぞおかしかつたでござんしようね、）と自分でも思い
 出したように快く微笑みながら、

（しようがないのでございますよ。）

以前と変らず心安くなつた、帯も早やしめたので、
 （それでは家うちへ帰りましよう。）と米磨桶こめとぎおけを小腋こわきにして、草履ぞうりを
 引かけてつと崖がけへ上つた。

(お危あぶのうござんすから。)

(いえ、もうだいぶ勝手が分つております。)

ずっと心得た意じやつたが、さて上る時見ると思いの外上までは大層高い。

やがてまた例の木の丸太を渡るのじやが、さつきもいつた通り草のなかに横倒れになつている木地がこうちようど鱗のようで、譬たとえにもよくいうが松の木は蝮うわばみに似ことてゐるで。

殊に崖を、上方へ、いい塩梅に蜿うねつた様子が、とんだものに持つて来いなり、およそこのくらいな胴どうなか中の長虫うろこがと思うと、頭と尾を草に隠して、月あかりに歴然ありありとそれ。

山路の時を思い出すと我ながら足が竦すくむ。

婦人おんなは深切うしろに後きづこを気遣きづこうては氣を付けてくれる。

(それをお渡りなさいます時、下を見てはなりません。ちよう

どちらゆうとでよツ。ほど谷が深いのでござりますから、目が廻^まうと悪うござんす。)

(はい。)

愚図^{ぐづ}愚図^{ぐづ}してはいられぬから、我身^{わがみ}を笑いつけて、まず乗つた。引かかるよう、刻^{とき}が入れてあるのじやから、気さえ確^{たしか}なら足駄^{あしだ}でも歩行^あかれる。

それがさ、一件じやから耐^{たま}らぬて、乗るところぐらぐらして柔かにずるずると這^はいそうじやから、わつというと引跨^{ひんまた}いで腰をどさり。

(ああ、意氣地^{いくじ}はございませんねえ。足駄では無理でございましょう、これとお穿き換^かえなさいまし、あれさ、ちゃんということを肯^きくんですよ。)

私はそのさつきから何んとなくこの婦人^{おんな}に畏敬^{いけい}の念が生じて

善か悪か、どの道命令されるように心得たから、いわるるま
に草履を穿いた。

するとお聞きなさい、婦人は足駄を穿きながら手を取つてく
れます。

たちまち身が軽くなつたように覚えて、訛なく後に従つて、
ひよいとあの孤家の背戸の端へ出た。

出会い頭に声を懸けたものがある。

(やあ、大分手間が取れると思つたに、ご坊様旧の体で帰らつ
しやつたの。)

(何をいうんだね、小父様家の番はどうおしだ。)

(もういい時分じゃ、また私も余り遅うなつては道が困るで、そ
ろそろ青を引出して支度しておこうと思うてよ。)
(それはお待遠まちどおでござんした。)

(何さ、行つてみさつしやいご亭主は無事じや、いやなかなか私が手には口説落されなんだ、ははははは。)と意味もないことを大笑して、親仁は厩の方へてくてくと行つた。

白痴はおなじ処になお形を存している、海月も日にあたらねば解けぬとみえる。」

十八

「ヒイイン！ しつ、どうどうどうと背戸を廻る鰐爪の音が縁へ響いて親仁は一頭の馬を門前へ引き出した。

轡頭を取つて立ちはだかり、

(娘様そんならこのままで私参りやする、はい、ご坊様にたくさんご馳走して上げなされ。)

婦人は炉縁ろぶちに行燈あんどうを引附ひきつけ、俯向うつむいて鍋なべの下を燻いぶして、振仰ふりあおぎ、鉄の火箸ひばしを持った手を膝ひざに置いて、

(ご苦労でござんす。)

(いんえご懇ねんごろには及びましねえ。しつ!)と荒繩あらなわの綱つなを引く。

青で蘆毛あしげ、裸馬はだかうまで逞たくましいが、蠶たてがみの薄おすい牡おほじやわい。

その馬がさ、私も別に馬は珍しゆうもないが、白痴殿ばかどのの背後うしろに畏かしこまつて手持不沙汰てもちぶさたじやから今引いて行こうとする時縁側へひらりと出て、

(その馬はどこへ。)

(おお、諏訪すわの湖あたりの辺まで馬市へ出しやすのじや、これから明朝あしたお坊様あるが歩行かつしやる山路を越えて行きやす。)

(もし、それへ乗つて今からお遁にげ遊つもりばすお意いではないかい。)婦人は慌あわただしく遮あわせつて声を懸けた。

(いえ、もつたいない、修行の身が馬で足休めをしましような
ぞとは存じませぬ。)

(何でも人間を乗つけられそうな馬じやあござらぬ。お坊様は
命拾いをなされたのじやで、大人しゆうして嬢様の袖そでの中で、
今夜は助けて貰もらわつしやい。さようならちよつくら行つて参り
ますよ。)

(あい。)

(畜生ちくしょう。)といつたが馬は出ないわ。びくびくと蟲うごめいて見える大
な鼻面はなツつらをこちらへ捻じ向けてしきりに私等わしらが居る方を見る様子。
(どうどうどう、畜生これあだけた獸けものじや、やい!)

右左にして綱を引張つたが、脚から根をつけたごとくにぬつ
くと立つていてびくともせぬ。

親仁おやじ大いに苛立いらだつて、叩たたいたり、打ぶつたり、馬の胴体について

て二三度ぐるぐると廻つたが少しも歩かぬ。肩でぶツつかるようにして横腹へ体をあてた時、ようよう前足を上げたばかりまた四脚を突張り抜く。

(嬢様嬢様。)

と親仁が喚くと、婦人はちよつと立つて白い爪さきをちよろちよろと真黒に煤けた太い柱を楯に取つて、馬の目の届かぬほどに小隠れた。

その内腰に挟んだ、煮染めたような、なえなえの手拭を抜いて克明に刻んだ額の皺の汗を拭いて、親仁はこれでよしという氣組、再び前へ廻つたが、旧によつて貧乏動もしないので、綱に両手をかけて足を揃えて反返るようにして、うむと総身に力を入れた。とたんにどうじやい。

凄じく嘶いて前足を両方中空へ翻したから、小さな親仁は仰

向ひつけに引ひきくりかえつた、ずどんどう、月夜に砂煙がぱつと立つ。
白痴ばかにもこれは可笑おかしかつたろう、この時ばかりじや、真直まつすぐ
に首を据すえて厚い唇くちびるをばくりと開けた、大粒おおつぶな歯を露出むきだして、
あの宙へ下さげている手を風で煽あおるよう、はらりはらり。

(世話せわが焼やけることねえ、)

婦人おんなは投なげるようにいつて草履ぞうりを突つかけて土間つまへついと出だる。
(嬢様かんちが勘違かんちがいさつしやるな、これはお前様まへようではないぞ、何でも
はじめからそこなお坊様ぼうように目をつけたつけよ、畜生ぞくせい俗縁ぞくえんがある
だッペいわさ。)

俗縁ぞくえんは驚おどろいたい。

すると婦人おんなが、

(貴僧あなたここへいらつしやる路みちで誰にかお逢あいなさりはしません
か。)

十九

「（はい、辻の手前で富山の反魂丹売に逢いましたが、一足先にやつぱりこの路へ入りました。）

（ああ、そう。）と会心の笑を洩して婦人は蘆毛の方を見た、およそ耐らなく可笑しいといつたはしたない風采で。

極めて与し易う見えたので、

（もしや此家へ参りませなんだでございましょうか。）

（いいえ、存じません。）という時たちまち犯すべからざる者になつたから、私は口をつぐむと、婦人は、匙を投げて衣の塵を払っている馬の前足の下に小さな親仁を見向いて、

（しおがないねえ）といいながら、かなぐるようにして、そ

の細帯を解きかけた、片端^{かたはし}が土へ引こうとするのを、搔取^{かいと}つて
ちよいと猶予^{ためら}う。

(ああ、ああ。)と濁^{にご}つた声を出して白痴^{ぱかくだん}が件^{くだん}のひょろりとした
手を差^{さしむ}向けたので、婦人^{おんな}は解いたのを渡してやると、風呂敷^{ふろしき}を
寛^{ひろ}げたような、他愛^{たわい}のない、力のない、膝^{ひざ}の上へわがねて宝物^{ほうもつ}
を守護^{しゆご}するようじや。

婦人^{おんな}は衣紋^{えもん}を抱き合せ、乳の下でおさえながら静^{しずか}に土間を出
て馬^{わき}の傍^{わき}へつつと寄つた。

私はただ呆^{あつ}気に取られて見ていると、爪立^{つまだち}をして伸び上り、
手をしなやかに空ざまにして、二三度^{たてがみ}鬱^{せい}を撫^なでたが。

大きな鼻頭^{はなづら}の正面にすつくりと立つた。丈もすらすらと急に
高くなつたように見えた、婦人^{おんな}は目を据え、口を結び、眉^{まゆ}を開
いて恍惚^{うつとり}となつた有様^{ありさま}、愛嬌^{あいきょう}も嬌態^{しな}も、世話らしい打解^{うちと}けた風

はとみに失せて、神か、魔かと思われる。

その時裏の山、向うの峰、左右前後にすくすくとあるのが、一ツ一つ嘴を向け、頭を擡げて、この一落の別天地、親仁を下手に控え、馬に面していたんだ月下の美女の姿を差覗くがごとく、陰々として深山の気が籠つて来た。

生ぬるい風のような気勢がするとと思うと、左の肩から片膚を脱いだが、右の手を脱して、前へ廻し、ふくらんだ胸のあたりで着ていたその单衣を円げて持ち、霞も絡わぬ姿になつた。馬は背、腹の皮を弛めて汗もしどとに流れんばかり、突張つた脚もなよなよとして身震をしたが、鼻面を地につけて一掴の白泡を吹出したと思うと前足を折ろうとする。

その時、頤の下へ手をかけて、片手で持つていた单衣をふわりと投げて馬の目を蔽うが否や、兎は躍つて、仰向けざまに身

を翻し、妖氣を籠めて朦朧とした月あかりに、前足の間に膚が
挟つたと思うと、衣を脱して搔取りながら下腹をつと潜つて横
に抜け出た。

親仁は差心得たものと見える、この機かけに手綱を引いたか
ら、馬はすたすたと健脚を山路に上げた、しゃん、しゃん、しゃ
ん、しゃんしゃん、しゃんしゃん、——見る間に眼界を遠ざか
る。

婦人は早や衣服を引かけて縁側へ入つて来て、突然帶を取ろ
うとすると、白痴は惜しそうに押えて放さず、手を上げて、婦人
の胸を圧えようとした。

邪慳に払い退けて、きっと睨んで見せると、そのままがつく
りと頭を垂れた、すべての光景は行燈の火も幽に幻のように見
えたが、炉にくべた柴がひらひらと炎先を立てたので、婦人は

つと走つて入る。空の月のうらを行くと思うあたり遙に馬子歌が聞えたて。」

二十

「さて、それからご飯の時じや、膳には山家の香の物、生姜の漬けたのと、わかめを茹でたの、塩漬の名も知らぬ蕈の味噌汁、いやなかなか人参と干瓢どころではござらぬ。

品物は侘しいが、なかなかのお手料理、餓えてはいるし、冥加至極なお給仕、盆を膝に構えてその上に肱をついて、頬を支えながら、嬉しそうに見ていたわ。

縁側に居た白痴は誰も取合ぬ徒然に堪えられなくなつたものか、ぐたぐたと膝行出して、婦人の傍へその便々たる腹を持つ

て來たが、崩れたように胡坐あぐらして、しきりにこう我が膳ながを視め
て、指ゆびさしをした。

(うううう、うううう。)

(何でございますね、あとでお食あがんなさい、お客様じやありませんか。)

白痴ばかは情ない顔をして口を曲めながら頭かぶりを掉ふつた。

(厭いや? しううがありますね、それじゃこいつしょ一所に召めしあがれ。

貴僧あなた、ご免めんを蒙こうむりますよ。)

私は思わず箸はしを置いて、

(さあどうぞお構いなく、とんだご雜作ぞうさを頂きます。)

(いえ、何の貴僧あなた。お前さん後のちほどに私と一所にお食べなされ
ばいいのに。困った人でございますよ。) とそらさぬ愛想あいそ、手早
くおなじような膳こしらを捨ててならべて出した。

飯のつけようも効々しい女房ぶり、しかも何となく奥床しい、
上品な、高家の風がある。

白痴はどんよりした目をあげて膳の上を睨ねめていたが、
(あれを、ああ、ああ、あれ。)といつてきよろきよろと四辻を
睨みます。

婦人はじつと睨みます。

(まあ、いいじやないか。そんなものはいつでも食られます、今
夜はお客様がありますよ。)

(うむ、いや、いや。)と肩腹を揺ゆすつたが、べそを搔かいて泣出し
そう。

婦人は困じ果てたらしい、傍かたわらのものの氣の毒さ。

(嬢様、何か存じませんが、おつしやる通りになすつたがよい
ではござりませんか。私わたくしにおきづかい遣はかえつて心苦しゆうござり

ます。)と慇懃にいうた。

婦人はまたもう一度、

(厭かい、これでは悪いのかい。)

白痴が泣出しそうにすると、さも怨めしげに流眄に見ながら、
こわれごわれになつた戸棚の中から、鉢に入つたのを取り出して手早く白痴の膳につけた。

(はい。)と故とらしく、すねたようにいつて笑顔造。

はてさて迷惑な、こりや目の前で黄色蛇の旨煮か、腹籠の猿の蒸焼か、災難が軽うても、赤蛙の干物を大口にしやぶるであろうと、そつと見ていると、片手に椀を持ちながら掏出したのは老沢庵。

それもさ、刻んだのではないで、一本三ツ切にしたろうといふ握太なのを横衡えにしてやらかすのじや。

婦人^{おんな}はよくよくあしらいかねたか、盜むように私を見てさつと顔を赭らめて初心らしい、そんな質^{たち}ではあるまいに、羞かしげに膝^{ひざ}なる手拭^{てぬぐい}の端^{はし}を口にあてた。

なるほどこの少年はこれであろう、身体^{からだ}は沢庵色にふとつている。やがてわけもなく餌食^{えじき}を平らげて湯ともいわず、ふツふツと大儀^{たいぎ}そうに呼吸^{いき}を向うへ吐くわざ。

(何でござりますか、私は胸に支えましたようで、ちつとも欲しくございませんから、また後ほどに頂きましょう、)と婦人^{おんな}自分は箸も取らずに二つの膳を片づけてな。」

「しばらくしょんぼりしていたつけ。

(貴僧あなた、さぞお疲勞つかれ、すぐにお休ませ申しましようか。)

(難有ありがとう存じます、まだちつとも眠くはござりません、きつき
体を洗いましたので草臥くたびれもすつかり復なおりました。)

(あの流れはどんな病にでもよく利きます、私が苦労をいたし
まして骨と皮ばかりに体が朽かれましても、半日あすこにつかっ
ておりますと、水々しくなるのでござりますよ。もつともあの
これから冬になりまして山がまるで氷つてしまい、川も嶮がけも残
らず雪になりましても、貴僧あなたが行水を遊ばしたあすこばかりは
水が隠かくれません、そうしていきりが立ちます。

鉄砲疵てっぽうきずのございます猿だの、貴僧あなた、足を折った五位鷺ごいきぎ、種々
なものが浴ゆあみに参りますからその足跡あしあとで嶮がけの路が出来ますくら
い、きつとそれが利いたのでございましょう。

そんなにございませんければこうやつてお話をなすつて下さ

いまし、寂しくつてなりません、本当に愧しゅうございますが、こんな山の中に引籠つておりますと、ものをいうことも忘れましたようで、心細いのでございますよ。

貴僧あなた、それでもお眠ければご遠慮なさいますなえ。別にお寝室ほんとまちかたと申してもございませんがその代り蚊かは一ツも居ませんよ、町方まちかたではね、上の洞かみほらの者は、里へ泊りに来た時蚊帳かやを釣つて寝かそ
うとすると、どうして入るのか解らないので、梯子はしごを貸せいと
喚わめいたと申して嬲なぶるのでございます。

たんと朝寐あさねを遊ばしても鐘かねは聞えず、鶏とりも鳴きません、犬だつておりませんからお心安こころやすうござんしよう。

この人も生れ落ちるとこの山で育つたので、何にも存じません代り、気のいい人でちつともお心置こころおきはないのでござんす。

それでも風俗ふうのかわつた方がいらっしゃいますと、大事にし

てお辞儀をすることだけは知つてでございますが、まだご挨拶あいさつをいたしませんね。この頃は体がだるいと見えてお情けさんになんなすつたよ。いいえ、まるで愚おろかなのではございません、何でもちゃんと心得ております。

さあ、ご坊様にご挨拶をなすつて下さい。まあ、お辞儀をお忘れかい。）と親しげに身を寄せて、顔を差し覗のぞいて、いそいそしていふと、白痴ばかはふらふらと両手をついて、ぜんまいが切れたようになつくり一礼。

（はい）といつて私も何か胸が迫つて頭つむりを下せまげた。

そのままその俯向うつむいた拍子ひょうしに筋が抜けたらしい、横に流れようとするのを、婦人おんなは優しゆう扶たすけ起して、

（おお、よくしたねえ。）

天晴あつぱれといいたそうな顔色かおつきで、

(貴僧あなた、申せば何でも出来ましょうと思ひますけれども、この人の病ばかりはお医者の手でもあの水でも復りませなんだ、両足が立ちませんのでござりますから、何を覚えさしましても役には立ちません。それにご覧なさいまし、お辞儀たいぎ一ついたしますさえ、あの通り大儀たいぎらしい。

ものを教えますと覚えますのにさぞ骨が折れて切せつのうござんしうう、体を苦しませるだけだと存じて何にもさせないで置きますから、だんだん、手を動かす働はたらきも、ものをいうことも忘れました。それでもあの、謡うたが唄うたえますわ。二ツ三ツ今でも知つておりますよ。さあお客様に一つお聞かせなさいましなね。)

白痴ばかは婦人おんなを見て、また私が顔をじろじろ見て、人見知ひとみしりするといった形で首を振つた。」

「左右とこして、婦人おんなが、勵はげますように、賺すかすようにして勧めると、白痴ばかは首を曲げてかの躋へそを弄もてあそびながら唄うたつた。

木曾きその御嶽山おんたけさんは夏なつでも寒さむい、

袴あわせ遣やりたや足袋あしぶ添そえて。

(よく知つておりましょう)と婦人おんなは聞き澄すかして莞爾にっこりする。

不思議や、唄うたつた時の白痴ばかの声はこの話をお聞きなさるお前様はもとよりじやが、私も推量したとは月鼈雲泥げつべつうんねい、天地の相違、節廻ふしまわし、あげさげ、呼吸呼吸の続くところから、第一その清らかな涼しい声という者は、到底とうていこの少年の咽喉のどから出たものではない。まず前の世のこの白痴ばかの身が、冥土めいどから管でそのふくれた腹はらへ通つわして寄越よこすほどに聞えましたよ。

私は畏つて聞き果てるに、膝に手をついたツきりどうしても顔を上げてそこな男女を見ることが出来ぬ、何か胸がキヤキヤして、はらはらと落涙した。

婦人は目早く見つけたそうで、

(おや、貴僧、どうかなさいましたか。)

急にものもいわれなんだが漸々、

(はい、なあに、変つたことでもござりませぬ、私も嬢様のことは別にお尋ね申しませんから、貴女も何にも問うては下さりますな。)

と仔細は語らずただ思ひ入つてそう言つたが、実は以前から様子でも知れる、金釵玉簪をかざし、蝶衣を纏うて、珠履を穿たば、正に驪山に入つて、相抱くべき豊肥妖艶の人が、その男に対する取廻しの優しさ、隔なさ、深切さに、人事ながら嬉し

くて、思わず涙が流れたのじや。

すると人の腹の中を読みかねるような婦人おんなではない、たちまち様子を悟さとつたかして、

(貴僧あなたはほんとうにお優しい。)といつて、得えも謂われぬ色を目に湛たたえて、じつと見た。私も首こうべを低おされた、むこうでも差俯さしうつむ向むけく。いや、行燈あんどうがまた薄暗くなつて参つたようじやが、恐らくこりや白痴ぱつかのせいじやて。

その時よ。

座が白けて、しばらく言葉が途絶とだえたうちに所在がないので、唄うたいの太夫たゆう、退屈たいくつをしたとみえて、顔の前の行燈あんどうを吸い込むような大欠伸おおあくびをしたから。

身動きをしてな、

(寝ようぢやあ、寝ようぢやあ)とよたよた体もちあつかを持扱うわいうわい。

(眠うなつたのかい、もうお寝か。)といつたが坐り直つてふと
気がついたように四辺あたりを睨みまわした。戸外おもてはあたかも真昼のよう、
月の光は開け拡げた家の内うちへはらはらとさして、紫陽花あじさいの色も
鮮麗あざやかに蒼あおかつた。

(貴僧あなたももうお休みなさいますか。)

(はい、ご厄介やっかいにあいなります。)

(まあ、いま宿やどを寝かします、おゆつくりなさいました。戸外おもて

へは近ちかい、夏は広い方がたが結句宜けつくようござります。貴僧あなたはここへお広くお寛くつろぎが
ようござんす、ちよいと待つて。)といいかけてつゝと立ち、つかつかと足早に土間へ下りた、余り身のこなしが活潑かっぱつであつた

ので、その拍子に黒髪くろひが先を巻いたまま項こうへ崩れた。

鬚ひげをおさえて戸につかまつて、戸外おもてを透すかしたが、独言ひとりごとをした。

(おやおやさつきの騒ぎで櫛を落したそうな。) いかさま馬の腹を潜くぐった時じや。」

二十三

この折から下の廊下ろうかに跫音あしおとがして、静しずかに大跨おおまたに歩行あるいたのが、寂せきとしているからよく。

やがて小用こようを達たした様子、雨戸はといどをばたりと開けるのが聞えた、手水鉢ちようずばちへ柄杓ひしゃくの響ひびき。

「おお、積つもつた、積つもつた。」と呟つぶやいたのは、旅籠屋はたごやの亭主の声である。

「ほほう、この若狭わかさの商人あきんどはどこかへ泊つたと見える、何か愉快おもしろい夢でも見てるかな。」

「どうぞその後を、それから。」と聞く身には他事をいううちが
抵牾もどかしく、膠にべもなく続きを促した。

「さて、夜も更けました、」といつて旅僧たびそうはまた語出かたりだした。

「たいてい推量うながもなさるであろうが、いかに草臥くたびれておつても
申上げたような深山みやまの孤家ひとりやで、眠られるものではない、それに
少し気になつて、はじめの内わし私わしを寝かさなかつた事もあるし、
目は冴さえて、まじまじしていたが、さすがに、疲つかれが酷ひどいから、心
は少しほんやりして來た、何しろ夜の白むのが待遠まちどおでならぬ。

そこではじめの内は我ともなく鐘の音の聞えるのを心頼みに
して、今鳴るか、もう鳴るか、はて時刻はたつぶり経つたもの
をと、怪あやしながら、やがて気が付いて、こういう処じや山寺ど
ころではないと思うと、にわかに心細くなつた。

その時は早や、夜がものに譬たとえると谷の底じや、白痴ばかがだら

しのない寐息も聞えなくなると、たちまち戸の外にものの氣勢がしてきた。

獣の跔音のようで、さまで遠くの方から歩行いて来たのでは
ないよう、猿も、蟻も、居る処と、気休めにまず考えたが、な
かなかどうして。

しばらくすると今そやつが正面の戸に近いたなと思つたのが、
羊の鳴声になる。

私はその方を枕にしていたのじやから、つまり枕頭の戸外じや
な。しばらくすると、右手のかの紫陽花が咲いていたその花の
下あたりで、鳥の羽ばたきする音。

むささびか知らぬがきツきツといつて屋の棟へ、やがておよ
そ小山ほどあろうと氣取られるのが胸を圧すほどに近いて来て、
牛が鳴いた、遠くの彼方からひたひたと小刻に駆けて来るのは、

一本足に草鞋を穿いた獸と思われた、いやさまざまにむらむらと家のぐるりを取巻いたようで、二十三十のものの鼻息、羽音、中には囁いているのがある。あたかも何よ、それ畜生道の地獄の絵を、月夜に映したような怪しの姿が板戸一枚、魑魅魍魎というのであろうか、ざわざわと木の葉が戦ぐ氣色だつた。

息を凝すと、納戸で、

（うむ）といつて長く呼吸を引いて一声、魘れたのは婦人じや。（今夜はお客様があるよ。）と叫んだ。

（お客様があるじやないか。）

としばらく経つて二度目のはつきりと清しい声。

極めて低声で、

（お客様があるよ。）といつて寝返る音がした、更に寝返る音がした。

戸の外のものの氣勢は動搖を造るがごとく、ぐらぐらと家が
揺いた。

私は陀羅尼を呪した。

若不順我呪

頭破作七分

如殺父母罪

斗秤欺誑人

犯此法師者

と一心不乱、さつと木の葉を捲いて風が南へ吹いたが、たち

まち静り返つた、夫婦が闇もひツそりした。」

「翌日また正午頃、里近く、滝のある処で、昨日馬を売りに行つた親仁の帰りに逢うた。

ちょうど私が修行に出るのを止して孤家に引返して、婦人と一所に生涯を送ろうと思つていたところで。

実を申すとここへ来る途中でもその事ばかり考える、蛇の橋も幸になし、蛭の林もなかつたが、道が難渋なにつけても、汗が流れて心持が悪いにつけても、今更行脚もつまらない。紫の袈裟をかけて、七堂伽藍に住んだところで何ほどのこともあるまい、活仏様じやというて、わあわあ拝まれれば人いきれで胸が悪くなるばかりか。

ちとお話もいかがじやから、さつきはことを分けていいませなんだが、昨夜も白痴を寐かしつけると、婦人がまた炉のある処へやつて来て、世の中へ苦労をしに出ようより、夏は涼しく、

冬は暖い、この流に一所に私の傍においでなさいというてくれ
 るし、まだまだそればかりでは自分に魔が魅したようじやけれ
 ども、ここに我身で我身に言訳が出来るというのは、しきりに
 婦人おんなが不便ふびんでならぬ、深山みやまの孤家ひとつやに白痴ぱかの伽とぎをして言葉も通ぜ
 ず、日を経るに従うてものをいうことさえ忘れるような気がす
 るというは何たる事！

殊ことに今朝けさも東雲しののめに袂たもとを振り切つて別れようとすると、お名残惜なごりお
 しや、かような処にこうやつて老朽おいくちる身の、再びお目にはか
 かれまい、いさき小川の水になりとも、どこぞで白桃しろももの花が
 流れるのをご覧になつたら、私の体が谷川に沈んで、ちぎれち
 ぎれになつたことと思え、といつて憐れながら、なお深切しんせつに、道
 はただこの谷川の流れに沿うて行きさえすれば、どれほど遠く
 ても里に出らるる、目の下近く水が躍おどつて、滝になつて落つる

のを見たら、人家が近づいたと心を安んずるよう、と氣をつけて、孤家の見えなくなつた辺で、指しをしてくれた。

その手と手を取交すには及ばずとも、傍につき添つて、朝夕の話対手、蕈の汁でご膳を食べたり、私が楫を焚いて、婦人が鍋をかけて、私が木の実を拾つて、婦人が皮を剥いて、それから障子の内と外で、話をしたり、笑つたり、それから谷川で二人して、その時の婦人が裸体になつて私が背中へ呼吸が通つて、微妙な薰の花びらに暖に包まれたら、そのまま命が失せてもいい！

滝の水を見るにつけても耐え難いのはその事であつた、いや、冷汗が流れます。

その上、もう気がたるみ、筋が弛んで、早や歩行くのに飽きが来て、喜ばねばならぬ人家が近づいたのも、たかがよくされ

て口の臭い婆さんに渋茶を振舞われるのが関の山と、里へ入るのも厭になつたから、石の上へ膝を懸けた、ちょうど目の下にある滝じやつた、これがさ、後に聞くと女夫滝と言うそうで。

真中にまず鰐鮫が口をあいたような先のとがつた黒い大巖が突出でいると、上から流れて来るさつと瀬の早い谷川が、これに当つて両に岐れて、およそ四丈ばかりの滝になつてどつと落ちて、また暗碧に白布を織つて矢を射るように里へ出るのじやが、その巖にせかれた方は六尺ばかり、これは川の一幅を裂いて糸も乱れず、一方は幅が狭い、三尺くらい、この下には雑多な岩が並ぶとみえて、ちらちらちらちらと玉の簾を百千に碎いたよう、件の鰐鮫の巖に、すれつ、縋れつ。」

「ただ一筋でも巖を越して男滝に縋りつこうとする形、それで
も中を隔てられて未までは零も通わぬので、揉まれ、揺られて
具さに辛苦を嘗めるという風情、この方は姿も寝れ容も細つて、
流るる音さえ別様に、泣くか、怨むかとも思われるが、あわれ
にも優しい女滝じや。

男滝の方はうらはらで、石を碎き、地を貫く勢、堂々たる有様
じや、これが二つ件の巖に当つて左右に分れて二筋となつて落
ちるのが身に浸みて、女滝の心を碎く姿は、男の膝に取ついて
美女が泣いて身を震わすようで、岸に居てさえ体がわななく、
肉が跳る。ましてこの水上は、昨日孤家の婦人と水を浴びた処
と思うと、気のせいかその女滝の中に絵のようなかの婦人の姿
が歴々、と浮いて出ると巻込まれて、沈んだと思うとまた浮い

て、千筋ちすじに乱るる水とともにその膚はだえ_こが粉に碎けて、花片はなびらが散込むような。あなやと思うと更に、もとの顔も、胸も、乳も、手足も全き姿となつて、浮いつ沈みつ、ぱッと刻まれ、あツと見る間にまたあらわれる。私は耐たまらず真逆まっさかさまに滝の中へ飛込んで、女滝をしかと抱いたとまで思つた。気がつくと男滝の方はどうどうと地響じひびき打たせて。山彦やまびこを呼んで轟とどろいて流れている。ああその力をもつてなぜ救わぬ、儘よ！

滝に身を投げて死のうより、旧もとの孤家ひとりぢやへ引返せ。汚らわしい欲のあればこそこうなつた上に躊躇ちゅうちよするわ、その顔を見て声を聞けば、かれら夫婦が同衾ひとづねするのに枕まくらを並べて差支さしつかえぬ、それでも汗になつて修行をして、坊主で果てるよりはよほどのもじやと、思切おもいきつて戻ろうとして、石を放れて身を起した、背後うしろから一つ背中たたを叩いて、

(やあ、ご坊様。)といわれたから、時が時なり、心も心、後暗いので喫驚して見ると、閻王の使ではない、これが親仁。

馬は売つたか、身軽になつて、小さな包みを肩にかけて、手に一尾の鯉の、鱗は金色なる、澆刺として尾の動きそうな、鮮しい、その丈三尺ばかりなのを、頬に藁を通して、ぶらりと提げていた。何んにも言わず急にものもいわれないで瞻ると、親仁はじつと顔を見たよ。そうしてにやにやと、また一通りの笑い方ではないて、薄気味の悪い北叟笑をして、

(何をしてござる、ご修行の身が、このくらいの暑^{あつさ}で、岸に休んでいさつしやる分ではあんめえ、一生懸命^{いつしょうけんめい}に歩行かつしやりや、昨夜^{ゆうべ}の泊^{とまり}からここまでたつた五里、もう里へ行つて地蔵様を拝まつしやる時刻じや。

何んじやの、己^{おら}が嬢様に念^{おもい}が懸^{かか}つて煩惱^{ぼんのう}が起きたのじやの。う

んにや、秘^{かく}さつしやるな、おらが目は赤くッても、白いか黒い
かはちゃんと見える。

地体並^{じたいなみ}のものならば、嬢様の手が触^{さわ}つてあの水を振舞^{ふるま}われて、
今まで人間でいようはずがない。

牛か馬か、猿か、蟻^{ひき}か、蝙蝠^{こうもり}か、何にせい飛んだか跳ねたかせ
ねばならぬ。谷川から上つて来さしつた時、手足も顔も人じや
から、おらあ魂消^{たまげ}たくらい、お前様それでも感心に志^{こころざし}が堅固^{けんご}
じやから助かつたようなものよ。

何と、おらが曳^ひいて行つた馬を見さしつたろう。それで、孤家^{ひとつや}
へ来さつしやる山路^{やまみち}で富山^{とやま}の反魂丹壳^{はんこんたんうり}に逢わしつたというでは
ないか、それみさつせい、あの助平野郎^{すけべいやろう}、とうに馬になつて、そ
れ馬市^{おあし}で銭^{あし}になつて、お銭^{あし}が、そうちこの鯉に化けた。大好物
で晩飯の菜になさる、お嬢様を一体何じやと思わつしやるの)。」

わたし
私は思わず遮った。
「お上人？」

二十六

上人は頷きながら呟いて、

「いや、まず聞かつしやい、かの孤家の婦人^{ひとつや おんな}というは、旧な、こ
れも私には何かの縁^{えん}があつた、あの恐しい魔処^{ましよ}へ入ろうという
岐道^{そばみち}の水が溢れた往来で、百姓が教えて、あすこはその以前医
者の家であつたというたが、その家の嬢様じや。

何でも飛驒^{ひだ}一円当時変つたことも珍らしいこともなかつたが、
ただ取り出でていう不思議はこの医者の娘^{むすめ}で、生まれると玉の

よう。

母親殿おふくろどのは頬板ほおつぺたのふくれた、毗めじりの下おつた、鼻の低い、俗にさし乳ちちというあの毒々しい左右の胸の房を含んで、どうしてあれほど美しく育つたものだろうという。

昔から物語の本にもある、屋の棟むねへ白羽の征矢そやが立つか、さもなければ狩倉かりくらの時貴人あでびとのお目に留とまつて御殿ごてんに召出めしだされるのは、あんなのじやと噂うわざが高かつた。

父親てつおやの医者ひきというのは、頬骨ほおばねのとがつた鬚ひげの生えた、見得坊みえぼうで傲慢ごうまん、その癖くせでもじや、もちろん田舎いなかには刈入かりいれの時よく稻いねの穂ほが目に入ると、それから煩わずらう、脂目やにめ、赤目あかめ、流行目はやりめが多いから、先生眼病の方は少し遣やつたが、内科と来てはからッペた。外科なんと来た日にやあ、鬢附びんつけへ水を垂らしてひやりと疵きずにつけるくらいなところ。

鰯の天窓も信心から、それでも命数の尽きぬ輩は本復するから、外に竹庵養仙木斎の居ない土地、相応に繁盛した。

殊に娘が十六七、女盛となつて來た時分には、薬師様が人助けに先生様の内へ生れてござつたというて、信心渴仰の善男善女？病男病女が我も我もと詰め懸ける。

それというのが、はじまりはかの嬢様が、それ、馴染の病人には毎日顔を合せるところから愛想の一つも、あなたお手が痛みますかい、どんなでございます、といつて手先へ柔かな掌が障ると第一番に次作兄いという若いのの（りょうまちす）が全快、お苦しそうなといつて腹をさすつてやると水あたりの差込の留まつたのがある、初手は若い男ばかりに利いたが、だんだん老人にも及ぼして、後には婦人の病人もこれで復る、復らぬまでも苦痛が薄らぐ、根太の膿を切つて出すさえ、鏽びた小刀

で引裂く医者殿が腕前じや、病人は七顛八倒して悲鳴を上げる
のが、娘が来て背中へぴつたりと胸をあてて肩を押えていると、
我慢がまんが出来るといつたようなわけであつたそうな。

ひとしきりあの藪やぶの前にある枇杷びわの古木へ熊蜂くまんぱちが来て恐おそろしい
大きな巣をかけた。

すると医者の内弟子うちでしで薬局、拭掃除ふきそうじもすれば総菜畠の芋いもも掘ほ
る、近い所へは車夫も勤めた、下男兼帶げなんけんたいの熊藏くまざうという、その頃
二十四五歳さい、稀塩散きえんさんに単舍利別たんしゃりべつを混ぜたのを瓶びんに盗んで、内が
吝嗇けちじやから見附かると叱しかられる、これを股引ももひきや袴はかまと一所に戸
棚の上に載せておいて、隙ひまさえあればちびりちびり飲んでた男
が、庭掃除そうじをするといつて、件の蜂の巣を見つけたつけ。
縁側えんがわへやつて来て、お嬢様くだん面白いことをしてお目に懸けましよ
う、無羈ぶしつけでござりますが、私のこの手を握にぎつて下さりますと、あ

の蜂の中へ突込んで、蜂を掴んで見せましよう。お手が障つた所だけは蟻しましても痛みませぬ、竹箒で引払いては八方へ散らばつて体中に集たかられてはそれは凌しおげませぬ即死そくしでござりますがと、微笑ほほえんで控える手で無理に握つてもらい、つかつかと行くと、凄すさまじい虫の喰うなり、やがて取つて返した左の手に熊蜂が七しち八はつ、羽ばたきをするのがある、脚あしを振うのがある、中には掴んだ指の股またへ這出はいだしているのがあつた。

さあ、あの神様の手が障れば鉄砲玉でも通るまいと、蜘蛛くもの巣のように評判が八方へ。

その頃ころからいつとなく感得したものとみえて、仔細しきいあつて、あの白痴ぱかに身を任せて山に籠こもつてからは神変不思議、年を経ふるに従うて神通自在じんつうじや。はじめは体を押つけたのが、足ばかりとなり、手さきとなり、果は間を隔へだていても、道を迷うた旅

人は嬢様が思うままはツという呼吸で變するわ。

と親仁おやじがその時物語つて、ご坊は、孤家ひとりぢやの周囲ぐるりで、猿を見た
ろう、墓ひきを見たろう、蝙蝠こうぶつを見たであろう、兎うさぎも蛇へびも皆嬢様に
谷川の水を浴びせられて畜生ちくしょうにされたる輩やから！

あわれあの時あの婦人おんなが、墓まづわに絡まつわられたのも、猿に抱かれた
のも、蝙蝠に吸られたのも、夜中に魑魅魍魎ちみもうりように魘おそられたのも、思
い出して、私はひしひしと胸に当つた。

なお親仁おやじのいうよう。

今のは白痴ぱくちも、件くだんの評判ひょうばんの高かつた頃、医者の内うちへ來た病人、
その頃はまだ子供、朴訥ぼくとつな父親が附添つきそい、髪の長い、兄貴おにぎがお
ぶつて山から出て來た。脚に難渋なんじゆうな腫物はれものがあつた、その療治りょうじを
頼んだので。

もとより一室ひとまを借受けて、逗留とうりゅうをしておつたが、かほどの惱なやみ

は大事じや、血も大分に出さねばならぬ、殊に子供、手を下すには体に精分をつけてからと、まず一日に三ツずつ鶏卵を飲まして、気休めに膏薬を貼つておく。

その膏薬を剥がすにも親や兄、また傍のものが手を懸けると、堅くなつて硬ばつたのが、めりめりと肉にくつついで取れる、ひいひいと泣くのじやが、娘が手をかけてやれば黙つて耐えた。

一体は医者殿、手のつけようがなくつて身の衰をいい立てに一日延ばしにしたのじやが三日経つと、兄を残して、克明な父親は股引の膝ひざでずつて、あとさがりに玄関から土間へ、草鞋を穿いてまた地に手をついて、次男坊の生命の扶かりまするよう、ねえねえ、と/or いうて山へ帰つた。

それでもなかなか摃取ららず、七日も経つたので、後に残つて附添つていた兄者人あにじやびとが、ちょうど刈入で、この節は手が八本も

欲しいほど忙しい、お天氣模様も雨のよう、長雨にでもなりますと、山畠にかけがえのない、稻が腐つては、餓死でござりまする、總領の私は、一番の働く手、こうしてはおられませぬから、と辞をいつて、やれ泣くでねえぞ、としんみり子供にいい聞かせて病人を置いて行つた。

後には子供一人、その時が、戸長様の帳面前年紀六ツ、親六十で児が二十なら徴兵はお目こぼしと何を間違えたか届が五年遅うして本当は十一、それでも奥山で育つたから村の言葉も碌には知らぬが、怜憫な生れで聞分があるから、三ツずつあいかわらず鶏卵を吸わせられる汁も、今に療治の時残らず血になつて出ることと推量して、ベソを搔いても、兄者が泣くなといわしつたと、耐えていた心の内。

娘の情で内と一所に膳を並べて食事をさせると、沢庵の切を

くわえて隅の方へ引込むいじらしさ。

いよいよ明日が手術という夜は、皆寐静まつてから、しくしく蚊のよう泣いているのを、手水に起きた娘が見つけてあまり不便さに抱いて寝てやつた。

さて治療となると例のごとく娘が背後から抱いていたから、脂汗を流しながら切れものが入るのを、感心にじつと耐えたのに、どこを切違えたか、それから流れ出した血が留まらず、見る見る内に色が変つて、危くなつた。

医者も蒼くなつて、騒いだが、神の抜けかようよう生命は取りより不具。

これが引摺つて、足を見ながら情なそうな顔をする。蟋蟀が擎がれた脚を口に銜えて泣くのを見るよう、目もあてられたも

のではない。

しまいには泣出すと、外聞もあり、少焦で、医者は恐しい顔をして睨みつけると、あわれがつて抱きあげる娘の胸に顔をかくして縋るさまに、年来随分と人を手にかけた医者も我を折つて腕組をして、はツという溜息。

やがて父親が迎にござつた、因果と断念めて、別に不足はないわなんだが、何分小児が娘の手を放れようといわぬので、医者も幸い言訛かたがた、親兄の心をなだめるため、そこで娘に小児を家まで送らせることにした。

送つて来たのが孤家で。

その時分はまだ一個の莊、家も小二十軒あつたのが、娘が来て一日二日、ついほだされて逗留した五日目から大雨が降出した。滝を覆すようで小歇もなく家に居ながら皆蓑笠で凌いだく

らい、茅葺の繕いをすることはさて置いて、表の戸もあけられず、内から内、隣同士、おうおうと声をかけ合つてわざかにまだ人種の世に尽きぬのを知るばかり、八日を八百年と雨の中に籠ると九日目の真夜中から大風が吹出してその風の勢ここが峠といふところでたちまち泥海。

この洪水で生残つたのは、不思議にも娘と小児とそれにその時村から供をしたこの親仁ばかり。

おなじ水で医者の内も死絶えた、さればかような美女が片田舎に生れたのも国が世がわり、代がわりの前兆であろうと、土地のものは言い伝えた。

嬢様は帰るに家なく、世にただ一人となつて小児と一所に山に留まつたのはご坊が見らるる通り、またあの白痴につきそつて行届いた世話も見らるる通り、洪水の時から十三年、いまに

なるまで一日もかわりはない。

といい果てて親仁おやじはまた氣味の悪い北叟笑ほくそえみ。

(こう身の上を話したら、嬢様ふびんを不便がつて、薪まきを折つたり水を汲む手助けでもしてやりたいと、情が懸かかる。本来の好心すきごころ、いい加減な慈悲じひやとか、情じやとかいう名につけて、いつそ山へ帰りたかんべい、はて措かつしやい。あの白痴殿ぱかどのの女房になつて世の中へは目もやらぬ換かわりにやあ、嬢様は如意自在によい、男はより取つて、飽あけば、息をかけて獸けものにするわ、殊にその洪水以来、山を穿うがつたこの流は天道様てんどうさまがお授けの、男を誘う怪いざなしの水、生命いのちを取られぬものはないのじや。

天狗道てんぐぢうにも三熱の苦惱くのう、髪が乱れ、色が蒼ざめ、胸が痩やせて手足が細れば、谷川を浴びると旧もとの通り、それこそ水が垂るばかり、招けば活きた魚うおも来る、睨めば美しい木の実も落つる、袖そで

を翳せば雨も降るなり、眉を開けば風も吹くぞよ。

しかもうまれつきの色好み、殊にまた若いのが好じやで、何かご坊にいうたであろうが、それを実まこととしたところで、やがて飽あかれると尾が出来る、耳が動く、足がのびる、たちまち形が変するばかりじや。

いややがて、この鯉を料理して、大胡坐おおあぐらで飲む時の魔神の姿が見せたいな。

妄念もうねんは起さずに早うここを退のかっしやい、助けられたが不思議なくらい、嬢様別してのお情じやわ、生命冥いのちみょう加ような、お若いの、きっと修行をさつしやりませ。)とまた一つ背中たたを叩いた、親仁おやじは鯉を提さげたまま見向きもしないで、山路やまじを上かみの方。

見送ると小さくなつて、一座の大山おおやまの背後うしろへかくれたと思うと、油旱あぶらひでりの焼けるような空に、その山の巔いただきから、すくすくと雲

が出た、滝の音も静まるばかり殷々として雷の響ひびき。藻抜けのように立っていた、私が魂は身に戻つた、そなたを拝むと斎しく、杖をかい込み、小笠を傾け、踵を返すと慌しく一散に駆け下りたが、里に着いた時分に山は驟雨、親仁が婦人に齎らした鯉もこのために活きて孤家に着いたろうと思う大雨であつた。』

高野聖はこのことについて、あえて別に註して教を与えはしなかつたが、翌朝袂を分つて、雪山越にかかるのを、名残惜しく見送ると、ちらちらと雪の降るなかを次第に高く坂道を上る聖の姿、あたかも雲に駕して行くように見えたのである。

(明治三十三年)

高野聖

後註

一 「」。 はママ

高野聖

底本：「ちくま日本文学全集 泉鏡花」筑摩書房
1991（平成3）年10月20日 第1刷
1995（平成7）年8月15日 第2刷

親本：「現代日本文学大系5」筑摩書房

入力：真先芳秋

校正：林めぐみ

1999年1月30日公開

2005年11月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。